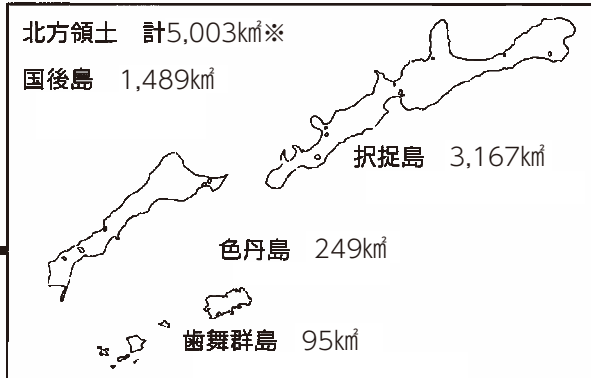


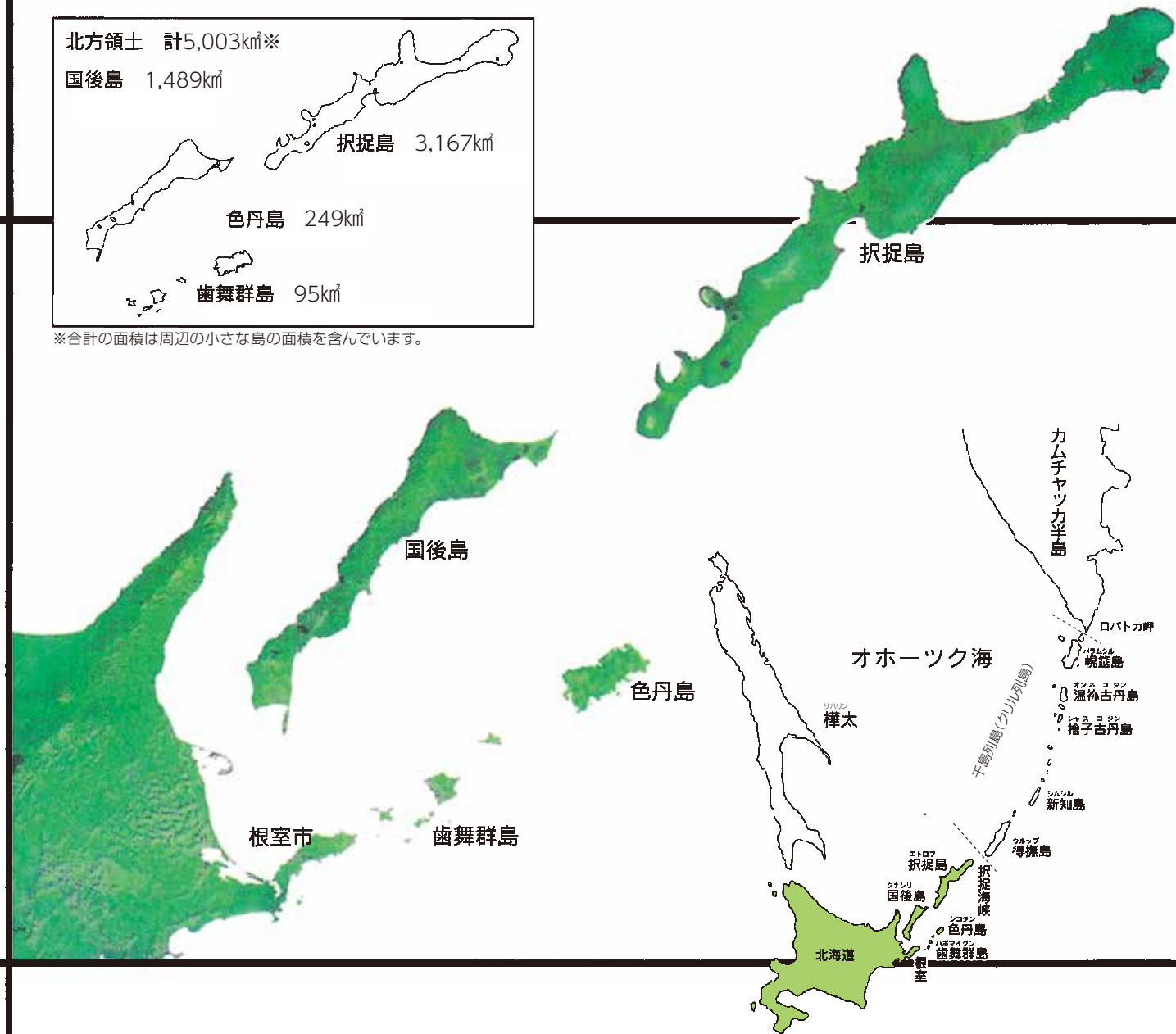
北方領土の早期返還を求めて

第29回「元島民の北方領土を語る会」集録

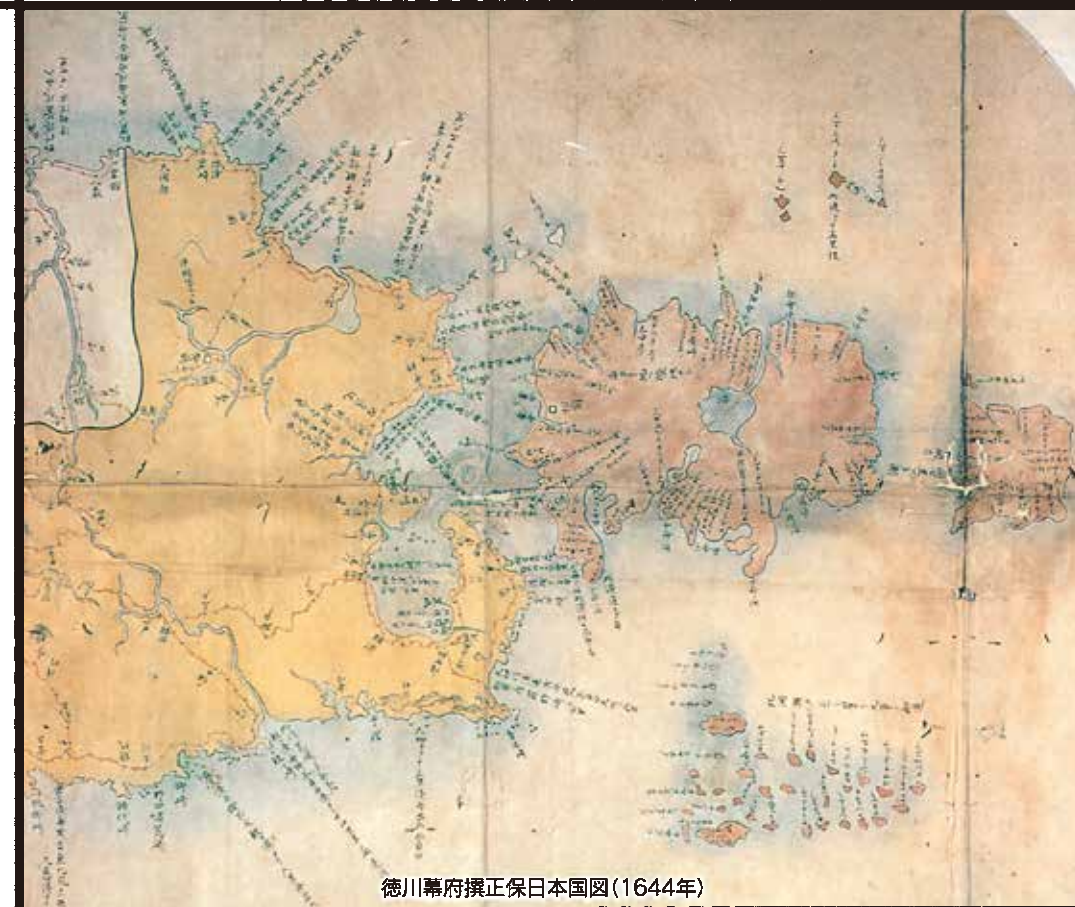
私たちが「北方領土」と呼ぶのは、
択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島(多摩島、志発島、
勇留島、秋勇留島、水晶島、貝殻島など)の四島です。



※合計の面積は周辺の小さな島の面積を含んでいます。



日本が北方領土の返還を要求するのには歴史的・国際法的に正当な根拠があります。



平成30年度
元島民の訴え 北方領土の早期返還を求めて
第29回「元島民の北方領土を語る会」集録

発行／平成31年3月

編集／~~編集~~ 北方領土復帰期成同盟

〒060-0001

札幌市中央区北1条西3丁目3番地

敷島プラザビル3F

〔TEL (011)205-6500 FAX (011)205-6501〕

ホームページ：<http://www.hoppou-d.or.jp>

印刷／株式会社 正文舎

も く じ

1	平成30年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱	2
2	平成30年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況	3
3	「元島民の北方領土を語る会」元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて	
	○ 北方領土返還要求運動について	北方領土復帰期成同盟 4
	【静岡県会場】	6
	○ 志発島元島民	児 玉 泰 子
	【新潟県会場】	16
	○ 多楽島元島民	河 田 弘 登 志
	【長崎県会場】	24
	○ 択捉島元島民	山 本 昭 平
	【石川県会場】	32
	○ 択捉島元島民	安 田 愛 子

1 平成30年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱

1 趣 旨

択捉島、国後島、色丹島及び歯舞群島からなる北方四島は、我が国民が父祖伝来の地として受け継いできたもので、いまだかつて一度も外国の領土となったことのない、我が国固有の領土である。

北方四島は、終戦直後に不法に占拠されたまま戦後70年を超えてなお、ロシアに実効支配されたままであり、故郷に帰る日を待っていた元島民も既に半数以上の方が亡くなっている。

これまで日本政府は、両国間の最大の懸案である北方領土問題を解決して平和条約を締結することにより、我が国の重要な隣国との間に真の相互理解に基づく安定的な関係を確立するという基本方針を一貫して堅持し、粘り強くソ連及びロシアに働きかけてきているが、解決への道筋は見えていない。

領土は国家、国民にとって基本的な問題であり、今後の日露関係を真に安定的なものにするためには、是非とも北方領土問題の早急な解決が必要であり、そのためには、北方四島が我が国に帰属している領土であることについて、国民一人ひとりが正しい認識を深めていくことが重要である。

この観点から、北方領土元島民及び元島民二世が自らの体験を通して北方領土が我が国固有の領土であることを訴え、北方領土問題の早期解決を目指し一層の国民意識の高揚を図る。

2 主 催

公益社団法人北方領土復帰期成同盟

3 後 援

公益社団法人千島歯舞諸島居住者連盟、全国地域婦人団体連絡協議会

4 開催時期

平成30年8月～平成30年12月

5 開催内容

(1) 説 明

内 容 北方領土返還要求運動について

説 明 北方領土復帰期成同盟（10分）

(2) 元島民の訴え

テーマ 北方領土の早期返還を求めて

内 容 北方領土の戦前の模様、ソ連軍の侵攻、強制引揚げ、返還運動取組状況、北方領土返還に向けた決意等について訴える

語り手 北方領土元島民二世（20分）

北方領土元島民（40分）

2 平成30年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況

開催月日／開催都市 開催団体	参加者 (人)	語り手 出身島	プロフィール
9月3日(月) 静岡県静岡市 静岡県地域女性団体 連絡協議会	89	児玉 泰子 志発島	昭和19年10月 北方領土返還要求運動連絡協議会事務局長 昭和22年秋 志発島生まれ 昭和52年 強制送還 平成8年 北方領土返還要求運動連絡協議会事務局長に就任 平成21年 総務長官表彰「北方領土返還要求運動功労賞」受賞 現(公社)千島歯舞諸島居住者連盟理事・関東支部長
9月28日(金) 新潟県新潟市 新潟県婦人連盟	83	河田弘登志 多楽島	昭和9年9月 団体役員 昭和20年11月 多楽島生まれ 昭和33年～平成7年 多楽島から引揚げ 平成9年 根室市役所勤務 平成25年 千島歯舞諸島居住者連盟理事 (公社)千島歯舞諸島居住者連盟副理事長
10月19日(金) 長崎県諫早市 諫早市連合婦人会	50	山本 昭平 択捉島	昭和3年4月 択捉島薬取村生まれ 昭和22年 強制送還 平成9年 千島歯舞諸島居住者連盟理事・関東支部長 平成21年 〃 〃 退任
11月17日(土) 石川県金沢市 金沢市校下婦人会 連絡協議会	370	安田 愛子 択捉島	昭和14年11月 択捉島薬取村生まれ 昭和22年 強制送還

3 「元島民の北方領土を語る会」

元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて

北方領土返還要求運動について

北方領土復帰期成同盟

本日は、お忙しい所たくさんの皆様にお集まり頂き、元島民の語る会を開催させて頂き、厚くお礼申し上げます。

また、お集まりの皆様方には、日頃から北方領土返還要求運動にご理解、ご協力いただき、深く感謝申し上げます。

北方四島は、父祖伝来の地として受け継いできたもので、いまだかつて一度も外国の領土となったことのない我が国固有の領土です。

その、北方四島が旧ソ連、現在のロシアの不法占拠の下におかれてから、今年で73年となりました。

北方領土問題は、第二次世界大戦の最中、日本の降伏直前にソ連が日ソ中立条約に反して参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後に、北方四島を不法に占領したことが始まりです。

ソ連は、アメリカに「日本がソ連に降伏すべき地域に、全クリル諸島を含め、北海道の一部、釧路と留萌を結ぶ北海道の北側を付け加えるよう」修正を求めましたが、アメリカは全クリル諸島の占領については容認したものの、北海道の北半分の占領は認めませんでした。

そのためソ連軍は、アメリカ軍の不在が確認された北方四島に兵力を集中し、昭和20年8月28日～9月5日までの間に北方四島の全ての島を占領しました。

この不法占領に対し、昭和20年12月1日、当時の根室町長^{あんどういしすけ}安藤石典氏が、連合国の最高司令官マッカーサー元帥に「北方四島は、古くから日本の領土であり、米軍の保障占領下において、住民が安心して生業につくことが出来るようにして欲しい」という旨の陳情書を提出したことが、北方領土返還要求運動の始まりです。

もし北方四島がアメリカの占領下に入っていたら、沖縄と同じように返還されていたかもしれません。

根室から始まった返還要求運動は、札幌、函館と裾野を拡げ、北海道全域に拡大して行きました。その後、昭和30年代に入ってから、全国的な運動として根付いたのです。

領土問題は国家の主権に関わる基本的な問題です。政府は「北方四島の帰属に関する問題を解決して、平和条約を早期に締結する」との、一貫した基本方針を堅持し、精力的に外交交渉を続けてきております。

昨年4月、モスクワで首脳会談が行われ、その際、平和条約締結に向けた環境整備の一環として共同経済活動の実施、高齢化した元島民の方々の負担軽減のため航空機での墓参が合意され、航空墓参については今年度も7月に行われました。

元島民の平均年齢も80歳を超えました。元島民の方が、一人でも多くご存命のうちに、北方

領土が返還され、自由に故郷へ帰れる事を願って止みません。

そのためにも、外交交渉の下支えとなる国民世論の結集、皆さんたちの北方領土返還要求に対する大きな声が必要なのです。

北方同盟では、関係機関、団体との連携のもと、積極的に返還要求運動に取り組み、政府の外交交渉を強力に支えて行くこととしておりますが、北方領土が不法占拠されて73年と長い時間が経ち、返還要求運動の先頭に立ってきた運動関係者も高齢化が進みました。

そのため、これからの返還要求運動を引き継いでくれる若い世代の方々の参加が必要不可欠です。

北方同盟としては返還要求運動を粘り強く展開し、次代の世代に対する返還要求運動への参加を推進するとともに、北方領土問題を風化させぬよう努力いたします。

最後に、皆さんにお願いがあります。北方領土問題は日本国民皆さんの問題です。択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、日本固有の領土であり、日本国民が開拓し、住んでいたところであり、住むべき所なのです。そのことを忘れないで下さい。

国民一人一人の返還への願い、これが外交交渉の下支えとなり、1日も早い故郷への帰郷を願っている元島民の方々の励みとなっているのです。

皆様方には、今後とも北方領土返還要求運動へのご理解とご協力をお願い申しあげ、説明を終わります。

皆さんこんにちは。ただいまご紹介預かりました児玉でございます。私は、島で生まれましたが3歳までしか島に居なかったのでかろうじて元島民です。時々3歳の頃の体験をスラスラとお話する方おられますが、その方は凄いなあと思っております。

私は物心が付いた頃から故郷の島に興味を持ちました。理由は、祖父母や周りの人達から活き活きと自分たちが島で暮らしていた時の話や、島に帰ったら何をするか等と熱い思いで語るのを聞いていたからです。その度に私は、目の前にある島に何故行けないのか、素朴な疑問がありました。

それでは、本日は私が体験したことや家族などから聞いたこと等を踏まえながら、1. 北方領土の概要と戦前の様子、2. 占領と強制送還された時の話、そして最後に望郷の念等を交えてお話をさせていただきます。

私の話をずーっと聞いていると、会場の気温も上がり皆さん眠くなってくるのではないかと思います。睡魔に負けないように、時々抜き打ちに質問を致します。そうすると緊張感が保てると思いますので、宜しくお願い致します。質問は難しくない内容です。

皆さんのお手元にはたくさん資料が渡っておりますが、北方領土は、歯舞、色丹、国後、択捉と言いますね。

それでは質問です。歯舞という島があると思っている方、手を挙げて下さい。実はですね、歯舞という名の島は無いのです。お手元の学習資料をご覧ください。こちらの見開き4ページと5ページを見て下さい。そうしますと、歯舞群島と書いてあります。小笠原にも小笠原という名の島がないのと同じように歯舞という島はありません。正式には、歯舞群島です。では、なぜ歯舞と言うかですが、根室から納沙布岬に行く途中16キロの所に歯舞村の本村がありました。その村の行政範囲は、納沙布から洋上に連なる離島も含まれておりました。終戦直後、納沙布岬からの離島が占領されました。

昭和34年に歯舞村と根室町が合併し、根室市になりましたので歯舞群島は根室市の一部です。従って現在、根室市は分断されているのです。

群島に1つ1つの島に名前がありますが、歯舞群島の名前を全部言うとしても長くなりますので、北方四島ということで簡略的に北方四島すなわち、歯舞、色丹、国後、択捉という呼び方をしております。

それでは、北方領土がどういう島かを少し話し致します。

皆さんの組織、全地婦連さんは婦人団体として家庭から北方領土を伝えようとして、北方領土と関係している昆布を販売されているはずですね。この昆布は歯舞群島の海域で採取されます。歯舞群島の海域一帯は、岩礁で良い昆布が自生します。陸はどうかっていうと、起伏が少なく一面の草原です。

色丹は、学習資料には載ってないのですが、戦前は鯨や上質な海苔が採れました。更に鱈が捕れました。鱈は干鱈に加工して本土に出荷されました。昔は、今のように冷蔵庫が普及していませんでしたので、海産物は干物にしたのです。

国後は、ここは凄くてお手元のパンフレットに、タラバガニが右側の方に描かれておりますが、戦前はタラバガニの宝庫でした。その他に海藻類も採れました。

択捉は鮭の宝庫です。特に昭和4年には、川に上る鮭が川の水量よりも多く、遡上する時に水に浸かれない大量の鮭は死んでしまったそうです。死んだ鮭が腐り、街中もの凄く臭かったそうです。腐った魚は穴を掘って埋めたそうです。

もう少し詳しく話しますが質問致します。皆さんは、沖縄問題の活動もされておられますね。沖縄と国後島とどちらが大きいと思いますか？沖縄が大きいと思う方、手を挙げて下さい。実はですね、沖縄より国後島の方がほんの少し大きいのです。なかなか気付かないでしょう。

日本列島の地図で、全列島が一枚に収まっているのを中々目にする事が無いですね。更に、北海道が大きいだけに北方四島が小さく見えちゃうのですね。

じゃあその隣の択捉はどうかっていうと、国後の約2倍あります。従って広さから言うと本州、北海道、九州、四国、次が択捉、国後、それから沖縄となるのです。そして、北の方にある寒くて何も無い、ちっぽけな所だろうと思われる方が多いようですが、これはね政府等の広報等に問題があるのでないかと思います。

先程、歯舞群島の話をしました、それではまた質問をしながら話を進めます。昆布が多いとそこにはどんな生き物が生息していると思いますか？解る方、手を挙げて下さい。昆布がないとウニは育たないのです。ウニは皆さん大好物だと思います。ウニ等の甲殻類は、昆布を餌にします。昆布の林の中に生息しています。ですから今、共同経済活動でウニの養殖の話もあるのです。歯舞群島の海域はウニの生息地ですが、ソビエトからロシアに移行され、ウニが乱獲され今では枯渇の危機状態に置かれています。そこで、良質な昆布が生息する歯舞群島の海域にウニの種を蒔き、復活しようと計画されています。

それではまた質問致します。ウニが大好きな海の動物は何か判りますか？水族館で人気の動物です。そうですラッコです。ラッコは海に潜り餌と石を持って浮上し、お腹の上で石でウニや貝を割って食べます。一日に相当の量を食べるのです。歯舞群島の岩礁で育つ昆布の森に生息する甲殻類はラッコの餌です。

私は、10年ぐらい前に故郷の歯舞群島の志発島に行った時、浜辺の近くでラッコが昆布に巻かれて寝ているのを見ました。今年も、洋上から一匹だけちょっとだけ見かけました。本当に沢山生息しているのです。大量のアザラシも見かけます。

婦人団体の皆さんは、昆布を売っておられますね。少し昆布の話をして致します。昆布は一年草です。海が明けると一番先に採る昆布は早生で、初春の限られた期間に採取されとっても柔らかい昆布で「棹前昆布」と言います。この昆布はデリケートなので、強い力で昆布を取ると切れるので、柔らかく曲がっても折れない「アオダモ」という木の竿を使います。その後、昆布が成長すると固い「杉」の木の竿を使います。戦前、これらの竿は富山県から運んで来ました。昆布の種類は主に「真昆布」です。生産された昆布の大半は富山県に送られて、戦前は、富山県から更に沖縄に渡り、更に中国に渡りました。中国では昆布を沢山食べていました。富山には、今でも日本一の昆布問屋があります。

色丹島は、東洋一美しい島と言われ、高山植物の宝庫です。一番高い山で400メートルぐらいです。洋上から見ると、緑のコントラストが大変綺麗で、とっても穏やかな島です。戦前は高山植物の学者が大勢訪れ、植物学者憧れの島でした。

国後に行きますと、先程話しましたがタラバガニやホタテの宝庫です。でも、タラバガニは捕れてもどうしよもなかったのです。網にかかると邪魔者で漁民を困られました。何故かと言うと、カニは良く言う「足が早い」傷むのが早いんですね。ですから、塩漬にしても保存が出来ないです。捕れて、捕れてどうしよもなかったのですが捨てるだけでした。国後では、邪魔者のカニを

どうしたら製品化できるかと試行錯誤がしましたが失敗続きでした。それでも諦めず苦勞に苦勞を重ね研究を続けた結果、国後島でカニの缶詰生産に成功したのです。質問です。タラバの缶詰は高いですが、カニ缶を一度位は開けた事はあると思います。缶詰の中に、カニの身の他に何か入っていると思いますが、お気づきですか？そうです。中に白い紙が入っているのです。実はこれを入れないとカニの酸が強いので缶が腐食するのです。何度も何度も失敗を重ねているうちに、この方法を見つけたのが国後島の缶詰工場なのです。画期的な発明でした。邪魔者のカニがお宝に変わったのです。結果、缶詰の生産が盛んになり、島民だけでは間に合わないで本州からも女工さんが来て働き、早朝から夜中まで缶詰工場はフル稼働でした。製品は日本国内は元より横浜からイギリスに輸出する様になりましたので、島は大変潤いました。

択捉は、先ほども言いましたが鮭の島です。今でも鮭がたくさん捕れています。島はとっても大きいのですが、この地図を見ても中々解らないでしょうが、島内には大小100本ぐらゐも川が流れ、水が豊かな島です。海に注ぐ川は植物プランクトンを海に運んできます。更に流水もプランクトンを運んでくるので、栄養豊富な海にはオキアミから魚類、そしてそれらを餌にする海獣類も生息しています。島の東の端には、落差141mの「ラッキベツの滝」が海に直接落ちています。白糸の滝よりも落差があり、日本で一番落差がある滝で、見事です。更に至る所に小さい滝が沢山あります。

質問致します。海の一番の大きな生き物って何かおわかりですか？パンフレットに絵が載っていますが、シャチなのです。この辺りはシャチが多いです。何故多いかという先ほど話しましたが、プランクトンやオキアミなど海の世界連鎖で餌になるお魚がいるからです。私は15年ぐらゐ前に、7頭ぐらゐの群れに会ったことありますが、これは壮観でした。本当に海が豊かだと思いました。

そして陸をいきますと、散布山という山があり、そこから北東の方に行くと薬取という村があります。その中間ぐらゐに、海岸線に切り立った白い崖が続きます。ビラ海岸です。世界の中でも珍しい崖じゃないでしょうか、素晴らしい所です。行く途中も大規模な原生花園があり、エゾキスゲを始め色々な花が咲きます。私、7月の中頃行って来たのですが一緒に行かれた、北海道の議員さんがこの湿原は北海道よりも凄、この雄大さは世界一だと感動されておられました。

実は国後と択捉には、特殊な動物が生息しているのです。ヒグマですが珍しい熊です。国後のある川と択捉のある一帯に、「白いヒグマ」がいるのです。ヒグマなのに白、灰色と白なのです。戦前から居ましたが何故こんな色になったか判らないのですが、年を取ったから白くなった訳じゃないのです。生まれた時から白なのです。

一説によれば、鮭を捕る時に黒っぽいと水に姿が反射するから白になったんじゃないかっていう説があるのですが、定かではありません。世界的には珍しい熊です。私は何回も島を訪れていますが、まだ見る事が出来ません。

海鳥もたくさんいます。珍しいのは絶滅危惧種の「エトピリカ」、更に海のカナリヤと言われている鳥「ケイマフリ」もいます。また6月から7月頃には、タスマニアから飛んで来る渡り鳥「ミズナギドリ」がこの辺りで一番大事な羽を生え替えます。それは、この辺りの海が餌のオキアミが豊富だからなのです。

国後と択捉には温泉があります。非常に良い温泉です。国後には北の方に爺爺岳という山がありますが、択捉島は山がいくつも連なり素晴らしい景色です。

では、戦前の話を少しします。私達が住んでいた頃、どの島でも生活の中で一番大切な動物は馬でした。馬は大切だったので、馬を入れる倉庫と昆布を入れる倉庫を作りまして、そしてその

一角に母屋に続いていました。なぜ馬が一番大事な動物かという、「船を巻く」船を陸揚げする時や昆布を乾場まで運ぶ時、そして島内の移動。これら全て馬でした。だから、馬をととても大事にしていました。

島には「駅通」という場所がありまして、駅は列車などの駅、通は通信の通と書くのです。駅通には馬が沢山飼育されていました。村から村の移動は徒歩か馬です。一頭の馬をずっと乗っていくと馬が疲れてしまうので、駅通で馬に乗り換えます。次の駅通でまた違う馬に乗り換えるのです。そうしてまた次の駅通で乗り換える。じゃあ乗り換えた馬はどうしたかという、馬は凄く利口で鞍を外した途端に一目散に自分の所へ戻るそうです。本州や北海道から来た旅人は、どっかに行く馬を借りるのですが、この人は馬に馴れてないことを見破り、馬に乗ってもプラプラプラ、寄り道、草を食べたり、休んだり、馬鹿にしたそうです。

島民は北海道との連絡をどうしていたかという、戦前はどの島にも全体に村がありました。そのため、春から秋まで根室側からの定期航路と函館からの定期航路の2つがありまして、生活物資はこれらで運んでおりました。冬には択捉の一部は結氷しない所もありましたので、そこは冬も、郵便物が届きました。簡単ですが、四島の概要を話しました。

ここから私の話をさせていただきます。

私が生まれたのは、この歯舞群島の中で一番大きい志発島という島です。陸地は真っ平らです。私達はよく冗談で、私達の島は海から見ると「煎餅島」だねって言うのです。本当に、海にお盆かお煎餅を置いたように何も無いのです。上陸すると草がいっぱい生い茂ってます。納沙布岬から23キロの所にあります。根室から納沙布岬まで23キロあって、そこからさらに23キロ行ったら私の生まれた家があります。

歯舞群島は意外と人が多かったんです。択捉島は、こんなに大きいのに総体で3,600人ですね。だけど、歯舞群島っていうのは5,200人もいます。私どもの島でも2,500人ぐらいいたんです。島は西前、東前と2つに分かれ、私は東前の方で生まれました。

家業は昆布漁でした。昆布漁をやるのは、春から秋までやるのですがとにかく一日中真っ黒になって働いたそうです。4時にお日様が昇る前から起きて、沖へ行く人のお弁当というか、木の大きな弁当箱にご飯とおかずをたっぷり入れ船に積み込みます。5時頃に男衆を乗せた船が漁場に向かいます。船を出すと、女性達は前日採取した昆布を朝日が昇る前に浜一面に干すのです。生の昆布は重くこれは大変な力仕事です。

昆布の生産って、今は機械での乾燥が多いです。しかし、戦前は全て自然乾燥でしたのでとても手が掛かりました。ただ一面を干すだけじゃダメなのですね。途中で風通しを良くするために、「砂引き」といって昆布を引いて動かし乾燥を促すのです。更に一本一本昆布の付け根「根本切り」をします。これは女、子供の作業です。それが終わるころには昼になります。昼食を取り休む間もなく船が帰ってくるのですが、帰って来てもすぐ陸揚げ出来ません。少し待ちます。

まずその浜一面に干してある昆布を小屋に入れなきゃいけないのです。天気の良い日はすぐに小屋には入れないのです。バリバリに乾いた昆布は動かすと折れちゃいますから。昆布が折れてしまうと、商品価値が落ちますので、お湿りが来るまで置いておきます。お湿りが来ましたら、昆布を束ね背負いやすい形にするのを「手絡」にすると言います。乾燥した昆布を小屋に収め終えたら、船から乾場に馬で乾場まで運び藁を掛けます。こう言うとなんか簡単に思えますよね。ですが、とても手間が掛かるのです。

そして秋から冬にかけて、小屋で出荷作業に取り掛かります。砂を取り除き、品質に分け一団に束ねて出荷していました。

私の先祖は南部藩、今の岩手から島に渡ったのは江戸時代です。どうして、岩手からあの島に渡ったのかは分かりません。私財を売り払い、船を買って島に渡ったのです。

あの頃はスマホがあるわけじゃない、電話があるわけじゃないのですが、よくぞ行ったと思いますよね。殆どの方達が、南部、仙台とか色んな所から渡りました。恐らく江戸時代に各藩が島を管理してたので、良い海産物が採れるという噂もあって、家財道具を全部売り、船を調達して島に渡ったのでしょう。

そうして、何をしたかっていうと、家がない。何も無い一面の草原。住む小屋を作り、次に昆布の干場を作らなきゃいけないのです。干場っていう昆布を干す所です。これが、ただ普通の所に干したら良質な昆布にはならないのです。先程言いましたが、一面の草むらですから、草を根から抜き取らなきゃいけない。本当に血と汗で開拓したというのはこの作業だと思うのです。江戸時代だから良いスコップがある訳でもなくて、鍬も良いのがなかったと思います。そこで、この干場を作るために草を抜いて、平らにしてそこに砂を入れます。砂利と砂を敷き詰めるのです。そして、その上にまた土を入れます。これを全部浜から人力で運んだのです。そして、土を敷き詰めたら、真ん中を少し高く傾斜を付けます。傾斜に碁盤の溝を付けます。さて、何のために碁盤にするとお思いますか？これは、なかなか判らないと思います。これは、水はけを良くする為に傾斜にして、溝を作るのです。そしてその上にもう一度砂利を入れて、それから砂を入れます。ようやく干場が完成です。昆布の一番の天敵は雨とか真水なのです。本当に大変だったろうと思います。

ちっぽけな家で、家族みんなが一生懸命仕事をし、昆布が採れて昆布が出来ればお金が入る。春から秋までは商店ではツケ買いでした。秋になって昆布を出荷したらようやくお金が入りツケを払えるのです。だから、秋には村の人が集まって、野原で「野遊会」っていうのですが、ぼた餅とおかずを作って持ち寄って収穫を喜ぶ。敬老会も島の楽しみの一つでした。村では私の祖父の「ドジョウすくい」が一番人気だったそうです。私、島を訪問する船に乗ると良く言われるのですが「あなたおじいちゃんのドジョウすくいは上手だったのよ」って。私は今から習おうかなと思っても、私がやっても様にはならないなと思います。

私の家族だけじゃなくて、この齒舞群島の方達は昆布を作るために本当に血が出るような努力をしたのです。冬から春の間は、漁具の手入れや網編みや編み物をしたりします。

春は少し遅いです。一面枯れ草なのです。5月の末に島に行った時ですね、雨が一週間も続いていたので枯草の中を歩いたら、スポンジの上を歩いているみたいでした。80歳を越えた元島民の方がズブズブと足を取られながら、自分の家まで歩きました。枯草の中に小さな黄色い花「ネコノメ草」が咲いていました。この花が咲くと春です。元島民はこの花を見つけると、そろそろ昆布漁の準備に取り掛からねばと思ったそうです。常に自然と共に生きてきたのですね。

何も無い様でも、草原には次々と可愛い花が咲きます。クロユリ、カッコウ花、この花はカッコウが鳴く頃に咲くので正式な花の名前じゃなくて、子供たちはカッコウが鳴くとカッコウ花が咲くと言って、花を捜し見つけると可愛いのを摘んで、お寺に持って行きました。

そういう中で生活する私達は、島民が1つの家族のようにして暮らしておりました。この生活の暮らしが変わってしまったのが、1945年です。家族から聞いた話です。この年の7月、西の方の空が真っ赤に染まりました。それは一週間も続いたそうです。これは何かと言ったら、アメリカ軍に攻撃で根室は焼け野原になりました。皆様の中には根室に行かれた方もおいででしょうけど、古い建物が余りないのはその時根室の市街地の約7割ぐらいが焼け野原になってしまったからです。

その時に私どもの家族とか島の人達は、赤く染まる空を見て、あー・・・根室が焼かれている。根室の親戚はどうしたんだろうかと案じながらも、そろそろアメリカ兵が島に来るのではないかと皆で心配したのです。何も変化は無く、昆布を採りながら普通の生活をしておりました。

8月15日に終戦のラジオを聞いたそうです。何が何だったのかよく判らない。ただ、ザーザーというラジオの放送を聞いて、みんな涙を流していた。何も変化が無いからこのまま島で平和に暮らせるのだらうと思っておりました。

ところが、8月28日に択捉島にソビエト軍が上陸して来ていたのです。当時、電話も通信も無かったから知らせがありませんでした。ですから私どもは普通に暮らしておりました。そして、択捉島に上陸してきたのですが、択捉は広いので全部を占領してないのです。ポイント、ポイントだけです。それから、国後、色丹、9月3日に私の島に上陸して来たのです。今日は9月3日。ご縁があるのかも知れませんね。

9月3日に外を見ていたら、大きな船が洋上に現れた。それはソ連の軍艦でした。ソ連兵が上がって来たのです。ソ連兵は何をしたかという、後でお手元の資料をゆっくり読んで欲しいのですが、その時に銃を構えて上陸して来ました。島の人にはアメリカ兵が来ると思っていましたので、まさか、ソビエト兵が。言葉は全く通じません。

一番先に、学校、それから旅館、役場、郵便局等、大きな建物から占領されました。そうして、お寺も大きかったのでお寺も占領されました。私達の島はお墓に埋葬せず、お寺の骨堂にお骨を全部納めていたのです。骨箱はとっても綺麗なもので、ソビエト兵は中に良い物が入っていると思ったのでしょうか、骨箱を次々に開け、骨をばらまきました。この様子を見てみんな恐怖に襲われました。これが文化風習の大きな違いです。銃を構え、言葉も判らないソビエト兵がいきなり土足で入って来たのですから、怖くてみんな震え上がったそうです。家に入ってくると時計を欲がり、幾つも腕に時計を付け、ねじを巻くことが判らないから、時計が止まると、壊れたと思って捨てたそうです。ソビエト兵は日本兵を匿っていないかと聞き、彼らも怖かった様でした。私の家にも入って来ました。占領され、島民は勝手に島内も歩くことも出来なくなりました。

年頃の娘さんが乱暴されることを避けるために、顔に煤塗り、髪の毛を切り詰め、胸にさらしを巻いてあぐらをかき男性のふりをしました。

我が家は11人家族でした。生まれて間もない私に危害が無い様に、母と私を屋根裏部屋に隠したそうです。ソビエト兵がまず何をしたかという、家族構成が何名いるか、名前を教えろと。それから次に聞いたのが、日本兵を匿っていないかと。日本兵に対してすごい恐怖真心があったのでしょうかね。

この日から、母と私はずっと屋根裏部屋で暮らすことになったのです。島を巡回する将校が各家庭を巡回するのが、一週間に1回とか4日に1回とか、サイクルが解ってきたのですね。その日は巡回予定日ではないので、母と私は居間に下りていました。どうしたことか将校が突然現れたのです。家族みんな凍り付き、言葉も出ない。ソビエト兵を騙していたわけです。将校は銃を持っています。母も家族もびっくりしていたら、私たちを見た将校もびっくりしたそうです。居ないはずの赤ん坊と女の人が子どもを抱いて座っているのですから。これはとんでもない事になったと家族は真っ青。将校が何か一生懸命言ったそうです。言葉は全く分かりませんが、将校が母に向かって両手を出したそうです。恐らく、抱っこ言ったのではじゃないかと思うのですが、そしたら母はもしかしたらこの人は子供を抱きたいのかと勝手に思い、私をその将校に差し出したのですって。ひどい親ですよ。普通はここで、強く抱きしめ渡さないのが素晴らしい母親なのですが渡したのです。私はその話を聞くと、とんでもない母親だとビックリしました。

これは結果的には非常に良かったようで、将校は私を抱いてとっても上手にあやしたそうです。そしたら、家族はみんな「ああロシア兵もソビエト人も同じ血が流れている、子供に対しては優しいのだな」と思った途端に恐怖心が消えてしまったそうです。言葉は通じなかったが、将校の仕草が母に安心感を与えたのかも知れません。この時、将校は身振り手振りで自分にもこの位の子がいるっていうのを伝えたいです。そして、この日から私には父親が2人出来ちゃいました、日本人の本当の父親とそれからソビエトの将校の父親です。そして、将校が馬で島を巡回する時に私を自分の前に座らせて、連れて巡回していたそうです。

私は、この将校に何時か会いたいと願っておりましたが、おそらくもう亡くなられていると思います。せめて、その人の子供に会えればいいなとます。そんなこともありビザなし交流などで、島に行く度にその方達には会えないが、代わりの人があつた島にいるのだと思っています。そんなこともあり、ロシア人に対して違和感なく怖くもなく、ロシア人の方々と付き合っております。

それでは、引き揚げの時のお話をします。私達が引き揚げの話をする時に、時々貴方たちは島を捨てたのではないのですか？と言われることがあります。沖縄には日本人がいましたよね。ですが北方領土には戦後日本人は居ない。これは理由が2つあります。

1つはですね、家族に若い子がいたりして、恐怖でロシア人とはとって一緒に暮らせないと脱島した人。小舟で脱出しています。その脱出の時に時化に遭って船が転覆し大勢の人が亡くなっています。

もう一つはソ連の貨物船に乗せられ樺太経由では函館に送られたグループです。脱出したあるお嬢さんの話です。当時18歳のお嬢さんは真夜中にお父さんに起こされて「今から行くぞ」と言われました。夜リュックを枕元に置いて、お父さんに言われた時に島を離れるかと思うと、悲しくて怖くて涙が出たそうです。そして船に乗る時にお母さんが、お互いの着物の襟に袋に入ったものを縫い付けたそうです。当時、若い女性はソビエト兵に乱暴されるって噂が蔓延していました「万が一、乱暴されるようだったら、これを食べてお互いに死にましよう」と言って、猫いらずの入った小さい饅頭が入った袋を襟に縫い付けたのです。それを聞いたら、尚更怖くてもうどうしようもなかった。

嵐の中で、船は全然進まなくなり、とうとう入り江で一時避難する事にしました。真っ暗な中どうにか上陸して、とりあえずはそこで「明日の朝まで待とう」と言われました。朝、陽が昇って明るくなった時、目に入ってきたのは浜辺に打ちあげられた沢山の死体でした。中には、先に脱出した知人も含まれていました。それを鳥が貪っていたのです。スコップも何もないので、そこら辺にあったホタテの貝殻でちょっとしか砂を掛けられなかった。その姿を見た時、もしかしたら自分もと思い、恐怖心で気が狂いそうだったそうです。辛い思いをしながら船の底で身をひそめていると、お父さんが「もういいぞ」というので甲板に出ると根室の街が見えたそうです。お母さんが、もうこれは不要ねと襟に縫い付けた小袋を取ったそうです。その方はその後、墓参やビザなし訪問になっても一回も行きませんでした。故郷には行きたいが、あの海峡を渡った時を思い出すと、二度と渡れないと言っていました。

それでは、私達がどういう風に送還されたかという、私達家族は島にずっと留まりたかったのです。ただ、送還命令があった時に万が一留まるとどうなるのか問うと、島に留まるとソビエトの国籍に入れられると言われました。家族は子供たちをソビエト人にするわけにはいかない。だから、引き揚げ命令船に従うしか無かったのです。

引き揚げの日に、わずかな風呂敷包みを持って、私は父のリュックの上に背負われ、それから妹は母に背負われ。ごくごくわずかな荷物だけを持って、家族11人で島の反対側の西側までトボ

トボと歩きました。私は3歳になっていました。本当に辛かったと思います。あの虚しさ、それから悲しさと、それから不安がいっぱいだったのでないかと思う。西側の方の浜辺に島の人が集められました。炎天下の中、島民一人一人を確認するので、長い間立たされました。

沖合に、ものすごい大きなソビエトの貨物船が停泊していたそうです。その船に乗せられるのです。浜辺から、北海道でいうと伝馬船っていうのですが、小さな磯舟です。その辺にあるボート、あの様な船です。それに乗せられて、貨物船の傍まで運ばれました。貨物船に乗るには梯子はないのです。そこで我々はどのような扱いをされたかという、貨物船ですから北海道という荷物を入れる網袋「モッコ」に数人入れられました。そこは洋上で揺れます。モッコはウインチで高く吊るされ上げられ、下を見ると海です。洋上で揺れるので、みんなは「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」と手を併せ念仏を唱えました。恐ろしくて失禁する人もいました。そして、ドサッと船倉の中に入れられる。貨物線の倉庫の中に入れられました。それから隣の島。そして、さらに隣の島。どこに行くっていうのは聞かされませんでした。送られたのは樺太です。

ただ、その途中で何があったかという、11月ですから海は時化です。貨物船の倉庫というのは、壁に付いた梯子しかないのです。そんな梯子を、子供や年寄りには上がりません。トイレにも行けないので、缶詰とか瓶とかに用を足しました。それを大人が甲板迄持って行って捨てていました。ところが、それらが甲板に流れ落ちるのです。海が荒れると、この糞尿を含んだ海水が船倉に上から流れてくるんです。私達は頭からそれをかぶりました。人間扱いされず、樺太まで送られました。体力もない子が死に、お婆さん、お爺さんが沢山死にました。病気が発生するので死体は海に流しました。そうして、サハリン連れて行かれた時には、もう冬でした。寒い中で「マンマ食べたい、マンマ食べたい」って亡くなった人が沢山います。死人はトラックで遠くに運ばれ埋められました。

その後、日本の船が迎えに来て函館に送られました。やっと函館に着いた時は、円の切り替えだったですから、持ってきたお金は何の役に立ちませんでした。わずか千円だけ与えられて根室向かいました。焼け野原の根室では11人の家族が一緒に住む家はありませんでした。始めは親戚が経営していた、遊郭の一角に住まわせてもらいました。それから私達家族は2つに分かれて暮らすことになりました。母方の家には私と妹と姉。父方の方には後の家族。島を出て以来現在まで、実は1回も私達は11人の家族で住んだことないのです。島に戻ると、家族全員で再び暮らせるそれまでの辛抱と言い聞かされました。

引き揚げて2年目で父が事故で亡くなりました。我が家で、一番島に帰りたがっていたのは祖母でした。何故かっていうと、祖母の父親っていうのは、岩手から島に渡って来たことは先に述べました。島に渡って、一生懸命仕事をして、良い船を持ち、島ではそれなりの生活をしていました。

ある年、春の海明けが遅れ、定期船がなかなか接岸出来なくて、荷物を置かないで次の島へ行ってしまふ日が続いた様です。村の人達が食べるお米や生活物資が不足しました。島の代表が協議して、代表3人で根室まで食料を買いに行くことになりました。その3人の中の1人が私の曾祖父だったのです。そうして、根室に買い物に行き無事根室から帰ってきました。家族も村の人も、みんなで海が見下ろせる小高い丘で待っていました。

島の東側には、潮が交差する、波の荒い三角っていう所があります。そこで横波を受けまして、船は沈みました。全員亡くなりました。もちろん曾祖父も。祖母は、自分の父親が目の前で死ぬ様子を見てしまったのです。島に居た時は、丘の上から月命日にはお参りをするのが祖母の勤めでした。

そんなこともあり「島に帰りたい、全員で島に帰り家族全員で暮らす」と島に拘りを持っていたのは一番祖母でした。「必ず帰る」と。「帰ったら家族一緒に暮らせるから辛いけど我慢すれよ」って良く言われました。

私達は、「引き揚げ者」という独特の名称を付けられて、根室でも貧乏なグループでした。とっても貧乏でした。

そんな中でも、島で家族全員が暮らしている一枚の写真を見ては、島に戻ると家族全員で暮らせると思い頑張りました。

引き揚げて来てから20年くらい過ぎ、どんどん、どんどん祖母も弱ってきました。島を見ながら色々な話をしていたのですが、ある夏の天気の良い日、島を見ていた祖母がいきなり海に入って島の方に向かって歩き出しました。海を歩いても島に戻りたかったのでしょう。その時は、家族が気付いて引き上げる事が出来ました。でも、祖母は翌年の初冬に、納沙布岬に近い小さな川で身を投げて亡くなりました。祖母の思いは、川の水になってあの島まで届いたのではと思っています。だから、祖母の代わりに島に戻るために北方領土返還運動に取り組んでおります。

私は、平成元年、初めて引き揚げてから1人で墓参団員として島に行きました。その時に家族全員と来たかったのですが、人数制限ありますから1人で来ました。ようやく小舟で浜に上がった時「ああ、やっと来た」と思うと、故郷が愛おしくて、砂を掬ってこれが私の故郷なのだ。そして打ち寄せる波の音が、母が北海道からお嫁に行ったので、「始めのうちは波の音が耳について眠れなかったのよ」と言っていたこの音がそうだったのかと。故郷の波の音が、私が幼い頃聞いた波の音と同じだったじゃないかなと思いました。故郷の音です。そして、帰り際にお祖母さんの代わりに海に向かって手を合わせました。あっという間に時間が経過し、何もなかったと思いました。こういう時、頭の中の思考能力が停止してしまいました。ああそうだと思って小船から手を差し伸べて、海の水を掬って故郷の水を掬い一口飲みました。海水ですからしょっぱかったです。私達のこの長い人生と同じ味が致しました。でも、私は、行けただけで良かったです。「せめて家族全員と来たかった」と思いました。その時は、引き上げる時にお埋めてきた所までしか行けませんでした。

先程、骨堂の話をしました引き揚げる時に私達家族や島民が何をしたかということ、骨堂のお骨をお寺の脇に埋めてきたのです、みんな。そこに浜辺から石を拾って、目印に置いてきました。今では私達が行くと、その辺りでお参りすることにしております。

7月に故郷の島に行って来ました。その時はどうにか私の生まれた家の跡地まで行けました。でも生まれた所ってというのは現在草原です。とにかく何もない、一面草です。

先輩達は浜辺が浸食されています。とにかく浜辺を歩き沼地を歩き、草むらを歩きながらも、沼を見ながら「沼があの辺りに見えるから、自分家はこの辺りだ」って言い草原の中で家の跡を探します。草に埋もれながらも家の基礎の小さなコンクリートをみんなで探します。「見つかったぞ」って言ったら、「ああ、良かった」って。何々さんの家がここだったら、この次がここの土手で何々さん、そして私自分の家に辿り着くことが出来ました。でも霧で何も見えませんでした。それでも私達は、元島民の方みんな喜んでいました。

80歳過ぎの方が1人で来ました。去年は上陸しても歩けなかったのですが、今年は船が近くに停泊できたので、居住地跡まで辿り着きました。その方が草の中立って、ずっと立ちすくんでおられました。その姿は祖母の姿と重なり、「みんな思いは同じなのだな」。

私達は、一昨年12月に実はプーチンさんにお手紙を出しまして、そのお手紙の中には「せめて島で、朝を迎えたい」と書きました。私達は今、故郷の島を訪れても泊まる事は出来ないのです。

ですから、そういう手紙を書きました。ずーっと草原を歩いていた時に沢山の可憐な花が咲いていました。その中で今まで一度も見ただけの「ホテイアツモリ草」が咲いていました。我が家の居住地近くでした。「ああ、おばあさんがここだと目印にこの花を咲かせて迎えてくれたのかなあ」と思い、なんか胸が締め付けられる思いがしました。

私達元島民は島は故郷です。故郷は皆さんお盆とか簡単に故郷に行けると思います。ところが、私達は本当に行けないのです。「行きたい、行きたい」って言いながら亡くなった人が大勢おられます。私の家族は11人でしたが、今残っているのは4人です。元島民はどんどん亡くなっております。

ただ一つ言えるのは、北方領土というのは、私達元島民の島ではなく、日本人の島です。皆さんの大切な領土です。今日、私が話した話は、お手元のパンフレットに占領から引き揚げの話が載っております。

お子さんとか家族に豊かな自然の話等、北方領土の話をしてあげて頂きたいです。

前回、今まで行ったことない所にロシア人の方に案内されて行きましたら、立派な石垣が残っていました。これは日本人が大正時代に作ったものです。案内して下さったロシア人の方は、島で大きな建設会社の方です。石垣を見て、日本人というのは凄いなって。大正時代に作ったものが、津波とか地震にも壊れず、こうして残っている。だから日本の技術というのは本当に凄いなと。だからしっかり共同経済活動をしていって、お互い良い方向にほしいと言っていました。

北方領土は自然がとっても豊かです。さっき言いましたように、温泉も沢山湧きで出ます。ダム開発をしないで、豊かな自然を守っていって日本の宝物として、そしてロシア人と一緒に暮らせる様になると良いと思っております。

皆さんが不自由なビザなし交流ではなく自由に行けるのは、この領土問題が解決しなければ行けないのです。9月には安倍総理がまたウラジオストクへ行って、首脳会談をします。今、色々ありますが、総理は北方領土に対しては積極的に動いて下さっています。領土問題っていうのは、私達の声を反映しての政府だと思えます。

私達の声無しにはこの交渉は進まないと思えますので、北方領土問題の解決に向け、今の交渉をしっかり見守り、返還要求運動に取り組んで下さい。

本日はどうもありがとうございました。

多楽島元島民 河田 弘登志 さん

ただいま紹介して頂きました私、河田と申します。私は歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の4つ合わせて四島とも呼んでおりますが、この内の歯舞群島多楽島という小さな島の出身でございます。

まず始めに、この度の北海道の地震に対しまして、色々のご心配頂きまして、誠にありがとうございます。

私、実はこの時根室にいなかったんです。たまたま東京に出ておまして、ラジオ聞きっぱなしで寝たものですが間もなく地震速報が入りました。早速、家の方とか色んなところに電話掛けましたけれども、全く通じない状況でした。携帯でようやく何件か通じまして、7日の日に根室に帰ったんですけれども私のところも家に帰ったら停電で7日の夜9時頃ようやく電気がつきました。

これまで新潟県には何回もお邪魔してんです。かつてはですね、根室の中学生の交流とか色んなことで2回程来ておまして、佐渡の方にも渡らせて頂いた経験もありますし、平成24年にも来てお話をさせて頂いて。

それからもう1つ、今四島交流が始まりまして色んな県の方、北方四島の方に交流に出掛けます。その機会には、必ず見送ったり出迎えたりしてるわけですが、新潟県の方もその中で何人もお会いしています。

新潟県と根室とは、切っても切れない関係にあります。根室市にも新潟県民会議というのがありまして、今少し少なくなっていましたけれども、かつてはですね年に一回は必ず集まって交流を深めておりました。

それから、もう1つは漁業の関係とか色んな関係で、根室を起点にして北方四島の方に掛けていった人が結構います。その中でもまだまだ続いているのが、碓氷商店という店がありまして、碓井さんは新潟県の出身です。今も新潟の米を使って北の勝という酒を造っております。これが大変美味しいということと、選挙のたびに凄く出るんです。北の勝ですから今も代々続いています。

それからもう1つは、小池次郎さんっていう人が漁業の関係で根室の方に渡って、色んなところに孵化場を作ったりしておりました。そして、後には北海道議会の議員になり、衆議院議員もやりまして今根室の公園に銅像がございます。

北方領土の関係につきましては、北方領土または北方四島と言っておりますけれども、根室半島から連なってるんです。そして歯舞群島は特に、今も根室市の面積の中に入っております。約93平方キロメートルですけれども、根室市の面積は512平方キロくらいよりないんですが、5分の1が占領されているというような状況にあるわけです。

北方領土の面積は、皆さんもうご承知だと思うんですけれども、約5,003平方キロあるんですけれども、千葉県とか福岡県とか同じぐらいの面積があります。島というので、皆さん本当にちっぽけな島だと思ってる人がいるんですけれども、決してそうではなくて大きな島があるんです。

地図を見ると判るように、この北方領土というのは千島列島に延びています。ここの海は、世界の三大漁場と言われたぐらい漁業資源の非常に多いところです。今も多いんですけれども、漁業資源の豊富なところで5千人以上の人が、当時戦時中といっても悠々と魚を捕ったり、昆布を採っ

たりして生活していたところなんです。

私が生まれ育った多楽島というのは、どういう島だったのか。納沙布岬から約45キロぐらい離れております。そして、先程も言いまし、言いましたけれども、面積は11平方キロぐらいで、小さな島です。仲間同士色々と話すと、お前の島は山もなければ平らな島で今にも水没しそうな小っちゃな島だ、と言われたこの小さな島に約1,500人の人が住んでいたんです。

私の通っていた学校は、今で言うところと中学2年までです。かつては高等科がありまして、高等科2年までありました。そして、当時は国民学校と言いましたが、国民学校の一番最初の1年生は私です。私が卒業してから国民括弧は6年間続いたんですけれども、一緒に通っていた生徒が240人いたんです。島にはたくさんの学校がありますけれども、これだけ生徒が居たというのは他にないんです。そして、島が小さいだけにですね、島中の人々が皆、一同に会す機会が多くて仲が良かったのです。今でもそうです。

そんな小さな島ですけれども、公の施設とは学校の他に、郵便局、巡査の駐在所とか水産の検査場という施設、あるいは診療所とか、そういう公共施設が古別という中心部に集中していました。大病でもすると根室の方に出てしまわなければなりませんでしたが、大体は島で間に合っていました。

北方領土は私達の祖先が3代、5代に亘って一つ一つ手で木を切る。根を掘る。草を採る。全部手仕事で、まさに血と汗を流して開拓した島なんです。私の祖父も富山県出身です。

実は、根室あるいは北方領土の地も歯舞群島にいた人は、かなりの人が富山県出身です。ですから17、18、19歳ぐらいで根室の方に出稼ぎに来て、漁業に携わる。最初のうちは17、8歳でも船頭とか色々やっていたそうです。そして、冬になると富山に帰ってたようです何年間かは。そのうちに、島に行ったら収入がたくさんあるよと。昆布も採れるし魚も捕れるということで、みんな渡ってきた。ですから、私達の先代が本当に汗水垂らしてそして開拓した島なんです。

島が小さくてもそうなんです。大きな島でもそうです。何代にも亘って、測量したり、標柱を択捉島に標柱を建てたり、近藤重蔵など色々おりますけれども、法律的に言っても先程言ったように、1855年条約を結んでから、以来このかた他国の領土になったことがない、島なんです。

昆布漁が始まりますと、私達も子供だったんですが手伝いました。昆布漁というのは手間がかかるんです。取ってきた昆布を満載して夕方船が帰ってきて、そして浜に揚げて積んでおくんです。そして筵かけて、翌朝天気の良い日ですと2時3時に起きるんです。子供たちも家族全員です。学校行ってない子供も当時はやる仕事があったんです。それはどういうことかという、筵ですと小さい子供でも運べますよね。これを浜に並べて昆布を乾燥させる。それから昆布を縛ってる縄があります、藁で編んだ。縄も乾燥させなきゃならない。

それから、当時は1年生2年生になったら昆布干しにも使われるんです。1本でも2本でも。当時の昆布は本当に長いんです。1、2年生でしたら1本か2本引くのがようやくなんです。それくらい長い昆布が採れました。そして、段々学年が上がって3年生ぐらいになると、乾燥した昆布を夕方になったら丸めて納屋に入れるんですけれども、最初のうちはその手絡と言いますが、それを1つぐらいずつしか担げなかったのですが、親っていうのは子供の使い方が上手なんです。そのうちに2つ担ぐようになるでしょ。そして力ある、力あるって大した褒められるもんですから、子供ですからもう1つ担いで3つくらい担ぐとか言って、親に上手に使われたんですね。それだけ手間の掛かることを、家族総出で寝る暇もないくらいに、5月から10月の初め位までは一生懸命仕事をして生活しておりました。

ところが、10月を過ぎてくると段々後片付けをするようになります。それから、富山の方から

来た人達も11月に大体仕事が終わったら、また富山へ帰ると。最初は行き来してたんですけど、段々段々定住する人が多くなって来るんですね。12月まではそういう後片付けをやるんですけども、1月、2月、3月になったら全く暇なんです。やる事が無いんです。大人は、大人なりに、ある家に集まってお酒を飲んでました。それから、青年。当時の二十歳ぐらいの青年というのはですね、みんな兵隊に行っていないんです。ですから青年団っていうと大体、今の中学2年卒業してから、まあ、兵隊行く前の二十歳前の人です。これはもう男女一緒になって、やっぱり勉強ということで3日間ぐらい続けて色んな事やるんですね。どういうことやっていたかという、学校に行ってたんですけども、そろばんの扱い方をろくに勉強してないので練習をしてみると、人の前に出て話をする練習です。弁論調にやる人もおりました。出来ない人は昔々あるところにと何でもいいから人の前で話をしなさいと訓練してたんです。

ところが、今になって思えば無駄ではなかったなと思うんですけども、私も遊びが好きだったんですね。3年生、4年生と2年間だけしか行けなかったんですけども、青年団に付いて行ってたんです。そろばんの練習するのが目的だったのか、行くところ行く所の青年団の家で、おやつを出してくれる。多分、それが目的だったのかなと思うんですけども、何が助かったかという人と人の接触があったものですから気軽に聞いて色んなこと聞けたなと、それが今考えてみると、夜遊びも決して無駄ではなかったなあと思ってるんです。

それからもう一つ、島を挙げて何が楽しみだったかという花見です。浪曲をやる人とか色々な人が来て、聞かせる場合もありました。それから、昔は今の様な映画ではないんですけど、大きな機械を持ってきて活動写真とか映してくれた人もいました。そういうのを見るのも楽しみだったんですけども、やはり冬になると色々と各一軒一軒回って歩くことも楽しみでした。

そのうちに島を4部落に分けていたので、青年団同士で演芸会をやるんです。そうすると競って色んなことをやるんです。ですから、私の父親なんかは兵隊になって帰って来てますから、もう30代でしたけれども年配の人たちが色々と指導するんです。演劇のシナリオなんかっていうのも自分達で、見たものを思い出しながら作って演じていた。そうすると、4部競って色んなことをやります。どこどこの部落は演劇が上手。浪曲が上手だとか踊りが上手だとか、そういうことを競います。学校に一堂に会して、教室の仕切りを外して繋げるんです。そこに朝から夕方まで弁当を持って、島中の人が集まって楽しむ。それが一つの楽しみだったですし、子供たちの運動会。運動会もグラウンドに一堂に会して、もう朝から夕方暗くなるまで弁当持ちで運動会をやりました。

それから多楽島には3つ神社あったんですけども、一番盛大にやったのは、琴平神社です。琴平神社にやはり島中の人が集まってました。

そうして、とにかく島中の人みんな顔を合わせる風な習慣がついていたものですから、今の時代になってもですね、各島では島ごとに色んな会があって、私の多楽会っていうのも役員は每期集まることにしてるんです。昭和40年代に、色んな組織を解体して父親達がやっていたものとか、若い人たちがやっていたものを合併して、多楽会という組織にしたんですけども、毎月8日に降っても照ってもやります。

先ほど地震の時も、どうしようということになって相談を受けたんですけども、7日の日にですね「いやいや、明日まで、ぎりぎりまで待ちましょう」って言って、7日の日の夜9時頃電気がついたもんですから、早速8日の日に集まりました。

これはどうしてやらなきゃいならなかったかということがもう一つあるんです。設立してから休んだことがない。天皇陛下が亡くなった時ですね、どうしよって、「いやいや、粛々とやり

ましよう」ってことで、やりました。

それともう1つは、9月23日にお祭りをやるんです。これはなぜかっていうと、本当は20日だったんですけども、20日っていうと必ずしも休みにならないんですね。23日は必ず休みになります。午前中はお寺の方に行って来て下さいと。午後から神社の方に来て下さいっていうことで、もう時間も日にちも全部決めて今も仲良く今も暮らしております。

ところが、昭和20年8月15日終戦になりました。日本はですね、負けるなんてこと父親ですら思っていなかったんです。ですから、この日も僕の父親なんかは今日も昆布を採りに行って夕方帰ってきて、ようやくその話を聞いたんです。今のようにですね、無線があるとかそういう時代じゃないですから、陸に帰って来てから聞かなきゃわからない。そうしましたら、今でも目に写るですけども本当は昆布の荷揚げをしなきゃならないんですけども、浜に座り込んでしまっただけなんです。がっかりして。やっぱり軍隊で生活した関係もあるんでしょうけれども。

終戦になってから8月28日にソ連軍が択捉島に入ってきた。そういう情報も軍隊には入っていたらいいんですけども、私達は全然知りません。それから、9月に入って、国後島。そして、色丹島。私達の島に来たのは、9月4日と言われています。そして、5日までにはこの北方四島全部、ソ連軍によって占領されたということでございます。

ソ連軍がその島に来た時には、私は今でも、最初に通っていった兵隊はウニウスと言います。多楽にも三重県出身の方が多かったんですけども、軍隊にもおりました。三重県出身の兵隊がいたんですけども。多楽にも兵隊がいて、仲良くしていた見覚えのある兵隊がいたんですけども、その日は軍の行事をやっていたそうです。どういうことをやっていたかということ、戦争に負けたわけですから、隊長が色々な武器の返納式をやろうと、兵隊全員を集めて武器の返納式をこれは天皇陛下からお預かりしたものだということで返納式をやっている時にその情報が入ったんです。

そして、下士官が私の隣の家の馬に乗って、警察に行ったそうです。行ったのは判らなかつたんですけども、一番最初に向こうの隊長らしい人を馬に乗せて私の家の前を胸を張って案内して、軍隊がいる所まで案内していたのを、ずっと見ておりました。その時の、馬車に乗っていた兵、隊長らしい人が銃を構えて何か起きるんじゃないかと警戒してるんですね。あっちを見こっちを見しながら行ったのを窓からずーっと見てました。すぐそこを通ってるんです。

その後しばらくしてから、ソ連の兵隊が2人1組になって各家に土足で上がって来ました。実は私の家は、新築して10日も経ってないんです。そこにですね、土足で入って来たんです。ちょうど家には、祖父も父親も何か別の用事で出てたと思うんですけども、そこに母親と私を頭に5人の兄弟がいたんですけども、そこに入って来たものですから最初はびっくりしました。親はどれほどびっくりしたかわかりませんが、子供もびっくりして、母親の背に隠れるようにしてやることを見てました。

一番先に言ったのは、日本の兵隊を匿っていないかです。それから、何かアメリカアメリカ言っていましたから、アメリカの兵隊がいないかっていうようなことを、聞いていたようです。そのうちに、銃で天井を突くんですね。それは、武器とかそういうものを隠し持っていないか。あるわけないんですけど、何もないっていうことが判ったら、私物を調べるんです。彼らは必要な日本語を覚えて来てるんです。それは何かっていうと、子供でも判るんです。「トッキートッキー」って言うんです。「トッキートッキー」って柱時計とか目覚ましじゃないんです。腕時計がないかって。これを欲しがりました。私の母親もしてたんですが、当時は皮のバンドがなくてゴムの紐でつけてました。なので割烹着の中に隠したんです。これは見つかりませんでした。

その次に言ったことはですね「サッキーサッキー」って言うんです。「サッキーサッキー」酒です。酒がないかっていうことです。これは見つかりました。今ですと、瓶に入れてですね焼酎でも清酒でも栓をしておくとか匂わないですよ。当時はそういうものがないんです。ですから、家のじいさんっていうのは晩酌に少しは飲みたい方だったもんでしたから、母親が気を利かせてご飯と麴を入れて発酵させて、甘酒をまず作るわけです。甘酒の時には子供たちが頂けばいいんです。それが段々段々段々発酵してくると、もの凄くいい酒になるんです。これを瓶に入れて戸棚の下に入れておいたんですけれども、これは匂いで判りました。これはその時は何も飲ませる気なかったです。

あとは、何も持って行く物がないと引き出しを開けて、カミソリとかバリカンとかそういう物を持って行きました。やがて、段々段々日にちが経って慣れてきた頃に、見つけた酒を兵隊2人が飲みに来るんです。まあ、大人になってから、私も成人になってから判ったんですけれども、どこの飲兵衛も酒飲んだらなかなか帰らないもんだなと思ったんですけれども、なかなか帰らないんです。それで下士官が迎えに来て、ようやく帰るんです。そして次の日は来ないかと思たらまた来るんです。この繰り返しですね。

そして、ちょうど9月ですから漁業の時期ですね。ある時に、父親に船に乗せられ夕方、島のあちこちから船が出てたんですけれども、イカ漁の時期だったもんですから、売るとかそういうことじゃなくて、自分たちの食べる用にイカ漁に出たんです。出る時はまだ、明るいうちに出たんです。そして夜中に帰って来たらですね、闇夜にもものすごいエンジン音を轟かせて帰って来たんです。多分ね、何事が起きたかと思ってびっくりしたんだと思うんですけれども、まあ威嚇ですね。あっちこっちで撃たれたたんです。そういうことが続くと尚更安心して島に住んでられないってようになって。また、夜中にですね、少しの荷物を積んでこっそりとね、抜け出していく人がドンドンドン出ました。9月の末頃になったらですね、かなりの人がそういう風にして出て行きました。

そして、学校2学期なったけども学校に行った覚えがないんです。学校に行けないわけです。遊び相手も近所にいないんです。それで、誰に遊んでもらっていたかというです。ソ連NO.2なんですけれども、アレキセ、アレキセと言ってた彼に遊んでもらっていたんです。遊んでもらってたって何かやって遊ぶことじゃなくて、日本の弾薬がたくさんあります。家の船で打ち残った弾薬投棄もやってたくらいですから。手榴弾とか、それから銃、日本の銃とか弾がにたくさんあるんです。それを手榴弾を的にして打って遊んだりとか、それを黙って見てたんですよ。そしてある時、学校行きたいなあっていうことをちらっと言ったら、子供は学校に行かなかったら頭が馬鹿になる。何を言っているのか判らないけれど、おれは11年間学校行ったということを言われて、家に帰ってきてから、母親に聞いたら、頭がキャベツのようになって馬鹿になるってことよ、そう言われました。

しばらくしてからですね、先に脱出した私の叔父さんがですね、船で白昼堂々と迎えに来てくれたんです。こういうことあり得ないんです。明るいうちに。そして、今まさにですね、私と3年生の弟と2人で乗って、今島を出ようかな離れようかなと言ってる時に、ちょっと待ってと。あ、これは出たらダメなのかな、行ったらダメなのかなってとそう思ってた、アレキセが別の兵隊とですね学校に行っって新しい机を担いで馬で来ました。そして、向こうに行っても机がないと思うから、これを持って行って使いなさいって。担いで持ってきてくれたんです。

それともう一つは、学校が終わったらまた戻ってきなさいよってことです。もちろんですね、私達は当時学校が休みになると島から出てきて親戚の家に泊まって遊んだりして、そういう行き

帰りしてたもんですから、それくらいのことだとしか考えないで出てきたんですね。ところがそれっきりです。帰れなかったんです。そして、残った家族もですね、親たちも兄弟たちもですね、もう自由に出ることが出来なくて、その後昭和22年23年に残っていた皆さんと一緒に強制送還されて帰ってきました。

強制送還と言うんですけれどもね、今の人に船に乗せられてって言う時にちょっと気を付けて言ってるんですけれども、大体客船を想像されると思うんですね、今ですと人を乗せるんですから、違うんです、貨物船です。1万トンクラスの貨物船です。そして、その船は近くまで入れないんですね。ずーと沖合までです。で、貨物船まで小さな船に少しの荷物を持って行くんです。

私の、父親達は9月の8日7日とかですね。今すぐ来てこの船に乗って島を出なさいと言ってですね、たまたま徴用されて来てた船に乗って出たんですけれども、隣の島に収容されて、船の手違いがあったんだと話には聞いてはいるんですけれども、1ヶ月半ぐらい、隣の島の民家にお世話になりながら居て、やがてその1万トンクラスの船がきて、もうどんどん、もうこれまでにたくさん乗ってるんです。択捉、国後、色丹とか色々乗って来てますから。そして、それに乗せられたんですね。

ところが、乗せられたんじゃないんです。積み込まれたんです。今のようにですね、階段上って乗るとかそんなことじゃないですね。今ああいう風景、これは見れないんですけれども、荷物積む時、今でしたらコンテナとかそういうのですね。見たことある人もいると思うんですけれども、当時はですね網目の大きな木のもっこです。それに荷物を入れて吊り下げて、貨物船に積み込む。全く荷物も人もですね、一緒くたにして、そして積み込まれたんです。ダンプでもって中に入れられたんですね。

ところが、家の父親はもうダンプの中は満杯になったので、多分沿岸に着くんだろうと思っていて2、3時間我慢すれば着くと甲板の上に行きました。そうしたら、どうも走ってる方向が違うと思って見ていたら、北へ北へと走っていたんですね。やがて、着いたところが今のサハリン、樺太の真岡というところに着いたんです。相当な時間掛かって。ですから、そうして強制送還された人の中にですね、やはり犠牲者が出てくる。一番はやっぱり年寄りですね。そして亡くなった人は乗せられないってということで、水葬にしました。

そして、樺太真岡に着いてもですね、先の方は収容されてるわけです。先に行った人が。当時どんなところに収容されたかと言うとですね、学校が色々あったと思うんですが、女学校ですね。そして、段に仕切ってですねお座りして入れるくらいの高さ3段くらいにして、その中の畳2枚くらいの中にろくなもの敷いてないんですよ、板敷いて。その中に私の家族が6人入れられたんですね。みんなそのような生活をしています。

ですけれども食べる物が無い。着る物もない。そうとう大変だったんですけれども、何が一番大変だと言うと、トイレ。船の中でのトイレは、船の中では貨物船ですから、船員が使うトイレがあってですね、たくさんの方が使うトイレなんです。ですから、どういう風にしたかって言うんですね、その当時の船っていうのは、日本の船もそうですけれども、デッキ張りになっていて、波がくーって入ってきて、うまく流れるようになってる。ですから、その甲板の上で、用を足すわけですね。ですけれども、そうそう風だけじゃない。荒れてくると波と一緒に中にも波が被る。船の中でもそうだったんですけれども、収容された時も、ただ溝ずーと溝を掘って、そこに板を渡して、そこで用を足したそうです。囲いも何もないんですね。そういうところで、落ちて亡くなった人もいたとか色々あるんですね。

それともう一つは、そういう貧しい環境の中でもって生活しているもんですから、犠牲者も出

ますね。家の母親がね、やはり父親も母親もですね、帰ってきてからね、そんな話っていうのを子供たちに余りしてないんです。する暇がないんです。生活が優先ですから。

母親が平成13年に88歳で亡くなったんですけれども、亡くなる間際の頃ですね、当時の話をしだしたの。何が残念だったかって、残念だった、残念だったって言うもんですから、何が残念だったのって聞いたら、亡くなった人をただ溝を掘った中にただ転がしたって。だから、一握りの土も掛けてやる事が出来なくて、本当に悔しいって。よく言ってたんです。そういう扱いされたんですね。今、その死体はどこに埋葬されてるかなかなか判らないんですけれども、そういう風な生活もやっぱり収容所ですって、やがて、函館の方から引き上げ船が迎えに来てくれて、それに順次乗って帰って来ました。

ところが、それに乗りに行くが死んだ人は乗せられない。ということですね、母親が覚えてた子供が亡くなった。亡くなったっていうのが判ると置いてこなかきゃいけない。それで、それを隠して死んだ子をずっとおぶって、函館まで来たという人もいます。

ところがですね、函館に着いてからまた試練ですね。今若い人たちにこんな話してもですね、何のことも判らないと思いますけども、当時はですね私シラミいないわっていう人いなかったんです。シラミが蔓延してるんですね。ましてや、そういう不衛生な格好してるもんですから。ですから、函館に着いた途端に頭から背中からDDTかけて真っ白になります。汚れてる服装のその上にDDTかけて。ですからね、私の家族見てても、函館に着いて遠い根室まで来るって言ったら元のJRですから、何日も掛かる。しかも客室の中に入れる人もいるし、外に出てる人もいます。

そして、おじさんの家に私も世話になってたんですけれども、どこの人もそうだと思うんですけれども、どうぞそのままお入り下さいって様な格好じゃなかったですね。もう11月。もう寒い時期で凍る頃です。それでも、そういう服装では入れないもんですから、外に水を汲んで、流して、それから着る物を借りて、そして、中に入ったということですね。

そういうような生活をずっとしてきたわけなんですけども、以来私達は北方領土を一日でも早く返還してもらわなければならないということで、一生懸命これまでやってきたんですけれども、皆さん方もご存じだと思うんですけれども、73年経ってもですねなかなか返還の兆しが見えないですね。残念ながらですね、私達も約17,300人弱の元島民がいたんですけれども、もう高齢化してしまいましたし亡くなってしまった。もう生存している人はもう、6,300人ぐらいになったんですね。

そして、その残った人の平均年齢はどれくらいになったかと言うと、83歳を超えてるんです。もう84歳になる。私も今日はね、記念すべき日なんです。今日84歳の誕生日なんです。もうそういう時代になってきますからね、私達がこれから返還運動続けていくのは大変なんですけれども、これまではですね2世対策としてやってきました。2世に引き継いでいかなきゃならないということで一生懸命やってきたんですけれども、今2世じゃないんですね。もう3世、4世の時代になってきた。いかにして3世、4世に引き継いでいくか、これが大きいな課題になっているんです。

色々お話は続くんですけれども、色んなこういう話を聞くより、私はやはり「百聞は一見にしかず」言います。納沙布岬からわざわざ手を伸ばせば届くような所に、おーいって言えばおーいって答えてくれるような所に島があるわけです。そういう島にですね、もう1,850メートルより先には行けないんです。そういうところに、元々住んでいた日本の領土があるんだということですね、よく見て頂きたいなあ。

それから、国を挙げて北方領土を目で見る運動というのをやっております。やはりですね、新潟からだ結構遠いと思うんですけども、機会がありましたらですね、ぜひ納沙布岬に行って、自分の目で見て頂ければなという風に思っております。

後継者の問題はですね、私達元島民だけの話じゃないんです。全国に北方領土の返還要求運動をしてる団体があるんですけども、皆さんそうだと思うんです。ですから、いかにしてこれからの2代目じゃなくて3代目、4代目の人にですね、引き継いでいかなきゃならないかということが、やはり私達の大きな課題になっておりますし、また全国の皆さん方にもこれが一番の課題かなと思います。

長々ですね、不慣れな話しましたがけれども、どうもありがとうございました。

択捉島元島民 山本昭平さん

皆さんこんにちは。山本昭平です。本日は諫早市連合婦人会創立70周年記念行事の一つとして、北方領土のお話をさせて頂くことになりました。非常に名誉なこととありがたく思っております。

私は1947年に北方領土から強制送還で函館にきました。我々は2年間抑留されてきました。日本の国土の中に彼らが入ってきて、日本人の我々を勝手に抑留してそして自分達の作業をさせる。非常にソビエトのやり方に不満を持って、無念の気持ちといいますか、悔しい気持ちで日本に送還されてきたわけです。

私は昭和3年生まれです。1928年です。1928年に生まれて、1947年に強制送還されてきた。たった19年しか自分の故郷で生活出来なかったわけです。しかしロシアが日本の北方四島を捕って既に73年にもなってるわけです。彼らは一度手に入れたら絶対それは返さない、そういう精神でおりますけれども、そうじゃないんだと。

今日は皆さんに北方四島というのはどんな所か、私が育ちました択捉島というのはこういう島だということを簡単にお話して、皆さんがこれから返還運動をやっていく参考になればと思っております。

択捉島の面積、択捉島という島の大きさっていうのは、皆さんなかなか理解出来ないと思います。この択捉島のこの大きさは、3,167平方キロメートルです。ただ、この長さ180キロあります。ですから、仮に新幹線が時速300キロで通り抜ける場合、30～40分掛かります。それぐらい大きな島です。ここに、川とか、滝が約180いくつあります。ここに、サケ・マスが全部川を登るわけです。ですから、3大漁業の1つと昔は言われておりました。

この択捉島周辺に土地の名前が付いているわけですが、約そうですね300カ所、300数カ所の漁場に名前が付いておまして、大体年間に9,000トンぐらい水揚げしてたんですね。それは、9,000トンっていう数字は1年間じゃなくて、実際には1年間なんです、実際に漁業するのは7月から8月9月10月、せいぜいこれぐらいの期間。3ヶ月から4ヶ月の間に9,000トンから10,000トンの水揚げをしているわけです。しかもこの漁場っていうのは、オホーツク海側ですけども、こちら太平洋側です。ほとんどの漁場っていうのは、このオホーツク海側にあったんですね。ですから、いかに収量が大きかったかと、そういうことでご想像が出来ると思います。

1945年の8月15日に終戦になったわけですけども、その時、じゃあ択捉はどうだったのかと申しますと、もうこの時代っていうのは、日本は本当に実際に勝つか負けるのか、そういうことが本当に判らないような、そんな混沌とした時代でした。ただこの当時の択捉島とかは、日本の軍隊が色々な所に駐屯しておりましたけれども、実際の終戦間際の状態っていうのは、非常に制海権も制空権も全部これはアメリカに握られておりました。ですから、終戦一ヶ月前の7月15日に根室が大空襲にあいました。ほとんど、根室の町の80%が爆弾の被害を受けて焼け野原となって、非常に被害がありました。

その時、私はちょうど父と一緒に択捉島に帰るべく船に乗っていたわけですが、その船も例のグラマン戦闘機に機銃掃射を受けたり、ロケット弾を受けたりして、父は死にました。それでその船は、択捉漁業の漁業に行く出稼ぎの人達がかかり乗ってたわけですが、その内ほとんど、もう170～180名乗ってたうち150名ぐらいがその船と一緒に沈んでいった。そういう被害を受けております。その時に、ロケット弾がキャビンに命中しまして吹っ飛んでしまって、そこに13人乗っ

ていましたが生き残ったのが、私と私のすぐ妹の2人きりなんです。そんな悲惨な中でやっと択捉に帰って、帰った途端に8月15日になって、すぐ終戦になりました。

終戦の時の状態ですが、8月15日にラジオもバッテリーで聞くわけですが、蓄電、蓄電池とか乾電池とかで付くわけですが、その乾電池も購入がままならないと。それぐらい、全ての物が欠乏していた時代です。ですから、我々が実際日本がポツダム宣言を受け入れて、無条件降伏したってということもですね、私が聞いたのは郵便局のお兄さんから聞いたんですね。その先は彼が言ったのは新しく新型爆弾が投下されたと。これがもう大変な被害らしい。そういうこともあって、日本はポツダム宣言を受諾することになったらしいと。そういう話でした。

その原爆ってという言葉は、これは私が日本に引き揚げて来てから初めて聞いた言葉なんです、島では原爆ってというのは、まだ判りません。とにかく、新型爆弾で大変な被害を受けたと。これ以上交戦していただけないと。そんな話で終戦を迎えました。

終戦になりました途端にですね、今まで択捉島とか国後島もそうですが、北海道や函館辺りから通っていた定期船が全く来なくなったんですね。本国から危険だから定期船は行くなと、そういうことになったんです。おまけにですね、北方四島ってというのは米が出来ません。一粒も出来ません。ですから、全部米は本国、本国ってというのはおかしいんですが、北海道から送ってもらうんですね。

ところが、もうあの当時は全部配給制です。そして北方四島ってというのは、オホーツク海側ってというのは、冬は全部氷が張りますシベリアの方から流水が流れてくるわけですが、その流水で船はもう通えません。半年の間、翌年の5月ぐらいまではほとんど船は来ないわけですね。ですからその間、備蓄米ってというのは絶対必要なんです。その備蓄米が実際にはもう途絶えてなかったんです。そういうことを考える時に、私はまだ17歳だったのですが、日本の国ってというのは、日本の国というより「国」というのは一体何だろうかと。とにかく、この戦争に勝たなきゃいけないってということで、一生懸命、頑張れ頑張れって言ってましたけれども、戦争が負けた途端に島のことは一切考えない。いわゆる、定期船も途絶してしまった。食料も来ない。じゃあどうなるんだと考えた時に、やっぱりこの離島というのを私は日本の国は捨てたんじゃないかと。我々はもう捨てられたんじゃないかという思いがして非常に悔しかったですね。

むしろ、戦争に負けたことというよりも、国が我々離島に対する米とかそういった物を供給続けるってことであればいいんですが、そういうものを一切切途絶えてしまったということ非常に悔しい思いをしました。

じゃあ占領軍がどこから来るのかということで、一般的に考えて場合は今まで千島列島を支配して、制空権とか制海権を持っていたのはアメリカなんです。我々戦時中は、根室から択捉へ渡る場合でも、命がけだったんですね。というのは、あそこにはアメリカの潜水艦がウヨウヨしておりました。7月15日は根室の大空襲です。それに対して日本の飛行機は1機も攻撃してないわけですよ。ですから、大体そういう状態が判っておりましたから、戦争に負けたらアメリカが来ると思ってたんですね。8月15日に終戦になって、みんなはアメリカだろうと思ってたんです。

ところが、8月27日に突然ニュースが入って、択捉島の散布半島ってあります。この東側にて留別港がありますけれども、そこに一番最初にソ連の駆逐艦が入ってきたっていうんですね。この駆逐艦がでずーと択捉島を回航して、留別という所があるんですが、留別に入ったんですね。ですから、その時は留別の人は何も判らなかつたわけです。いきなりロシアの駆逐艦が入ってきて、それで500人ぐらいの兵隊さんが上陸してきて、それが択捉島へソビエト軍が進駐してきた

時の状態なんですね。

彼ら上陸と同時に、日本の守備隊もいたんですが、日本の守備隊とは終戦の交渉をして、これは上手くいったんです。ですから、一発の弾の撃ち合いもなく彼らが上陸してきて、大体昼間のうちに彼らが択捉をなんとなく占領してきたという形なんです。

留別に入ったソビエト兵はですね、まず郵便局を抑えたんですね。留別の郵便局っていうのは、択捉島の中の各郵便局の有線電話があるので、コントロールセンターっていうわけじゃないですが、一応そこで色々調整していたんですね。ですから、そこを抑えると択捉島内の通信は全く出来なくなるわけです。ですから、ソビエトが留別に上陸した。その一報は我々薬取の方は判ったんですが、その後どうなるのか全然情報が入ってこないんです。

大体戦争っていうのは、今のベトナムから始まって、イランイラク戦争とか色々あって、とにかく残虐だということは皆さんもうご存じだと思いますが、とにかく戦争っていうのは、あういう残虐なことが日常茶飯事だったんですね。我々はとにかく戦争に負けたら何をされるかわからない。どんなことされても、敗戦国っていうのは甘んじてそれを受け入れないといけない、そんな観念がありました。ですから、村の人達は本当に戦々恐々だったんです。特に女性がそうだったですね。私の叔父は、父親が根室で被害を受けて死んでおりますので。

私は8人兄弟なんですね。女の子がもうほとんどで8人のうち2人だけが男の子で、私は長男なんです。17歳ですから、母親とその時はお祖母さんもいました。そんな女系の家庭だったんで、特に家の母は彼らが来たらどうしようということで、非常に悩んだと思いますね。私は母とどうやろうかと。逃げて、もし彼ら入って来て残虐行為をされようとされたらどうしようかと。じゃあ、お祖母さんがちょっと半身不随だったもんですから、私がお祖母さんをおぶって山に逃げようと。最終的にはやっぱり子供たち、私の妹たちはまだ小さいですから、この子供たちを何とかしなきゃいけないと、そういう思いをですね、母も覚悟を決めていたと思います。それぐらい戦争に負けた、負けた時には非常にそういった恐怖感がありました。

それが、長く続くんです。実際に薬取に来たのはですね、10月の5日ぐらいなんですね。それまでは、そういった情報何もなくていつ来るかいつ来るか、いつその鬼のようなソビエトの軍隊が来るか、非常に思い悩んでたわけですけども、9月の下旬に役場にソビエトの女の兵隊が来たっていうんです。私は見なかったんですけど、話を聞くとその女の兵隊がですね、2人の男の兵隊を連れて3人で馬に乗って来た。それで、女の兵隊のその胸にプラカードを下げていて、これに日本語で「この馬に水と飼料を与えて下さい」とそう書いてあったんです。とにかく3人の、いわゆる斥候なんです。それが来た。初めてそれで役場に来て、役場から回覧板が回ったのは10月5日にソビエトの軍がこの薬取に入ると。だからそれまでに、村の人達が例えば、刀剣とかそれから銃とか、ラジオとかそういったもの一切合切、役場に持ってきて下さいと。役場では、それを武装解除という形でソビエト軍に提供しますということで、回覧板が回りました。

私はとにかく、どういう兵隊が来るのかと、我々の年代っていうのは、日露戦争がありましたから、それが学校の教科書に書いてありました。ロシア軍のいわゆる203高地という有名ですが、そこを攻略した時のクロバトキン将軍とか乃木大将とかですね、そういった映画見ておまして、ロシア人というのは非常に背が高く、髭面で逞しい。

それともう一つは、私旭川の親戚の家に下宿、進学のために下宿していたわけですけども、私の叔母っていうのはカトリックの信者だったんですね。日曜日になると私を教会に連れて、教会に行ってたんですよ。その当時、旭川にはロシア人とか日系ロシア人とかポーランド人が何人かおまして、その人達をこう見て非常にこう体格が良くて大きいんです。皆さん大柄で。ああい

う兵隊が来ると思っていたんですね。ですから、これは大変だと思っておりまして。それから一週間ぐらいして通告通りロシア人、ソビエトの兵隊が入って来たんです。

一番最初に、後からわかったんですが一番偉い将校が、シネリニコフという中尉が副官2人を連れて馬に乗って家の前を駆け抜けてったんですね。その時、村の通達としては、ソビエト軍が通る時には、一切窓から覗いてもダメ、外に出てもダメ。とにかく、もうヒソヒソということだったんです。そういうことで、女の兄弟多いもんですから、万が一の場合は母と一緒にですね、お祖母さん持って逃げるという算段でいたもんですから、窓からこう、こっそり見てたんですね。そうしましたら、一番最初に馬の蹄の音が聞こえて、家の前を駆けていった、シネリニコフという中尉とそれから副官2人連れが、すぐ戻ってきたんですが、村の外れの所に川崎漁業っていう番屋がありまして、非常に洋館風の建物だったんですが、そこを兵舎にするという約束だったんでしょうね。そこを見に行ったんでしょう。

彼らが帰って行って、それで30分ぐらいして足音が聞こえてきたんです。日本の兵隊であれば町に入る時には、歩調を取ってですね入ってくるのですが、ズルズルズルと足を引きずる音が聞こえてきたんです。それで、私が窓から覗いていましたら、一番最初にシネリニコフという中尉が2人の副官を従えて馬に乗ってるんですが、その後から付いてきたのが、本当に普通の兵隊なんですよ。それが16、7なんで私と同じぐらいの年代の青臭い顔した兵隊が、ズルズルズルと来たんですね。顔も垢で手も垢で真っ黒。着ている物はですね、着ている物は軍服ですね。これがもう、垢で垢まみれになってもってギトギトに光ってるわけですよ。やはりソビエトっていうのは独ソ戦争でもって非常に難儀をしておりましたね。

兵隊っていうのは、例え少年兵であろうとも着替えはもちろんですし、何年間も戦地で戦ってきた、あるいは防備に付いていたわけですから、軍服なんかでも新しい物ないわけですよ。全部着たきり雀なんです。何も持ってないんですよ。ただ、持っているのは銃なんです。これがもう自動操縦なんです。それがもう、でかいやつなんです。小さいのは、本当我々ぐらいのような体格が持つんですね、そういった銃機関銃を全部下げて、ゾロゾロとこう行進して行ったんです。30人ばかりなんですね。もう疲れ果ててみんな足引きずりながら、土埃砂埃を上げて歩いて行くんです。あんなもの見て、私は「えーこんなに若い子供だったら、俺と話し合ったら話が通じるんじゃないか」とそんな思いがしました。

軍隊が入って来て、11時頃になりましたら役場の方から各戸主に役場の前に集まれというそういった通達があって、各戸主がみんな出かけて行ったんですね。あの時代っていったら、家が主体になって動いていたんです。ですから、戸主って言うんですね。行きましたら、薬取の戸主が6～70名集まっているんです。門の前にですね、集まってる。見たらですね、ソビエトの司令官みたい偉いのがですね、7～8人いるんです。すごいわいのがいて。それでもう憲章付けてですね。しかも外套が、引きずるような外套なんです。引きずるような外套着て、それで勲章、略章っていうんですか、そういうのをいっぱい光らせているんです。いつ来たのかは判らないんですね。私が見たのはシネリニコフが馬で駆けて行ってそれで、兵隊がぞろぞろと来た。恐らく船でどっかに着いたのかもしれませんが。それでいわゆる、戦勝宣言をやったんですよ。一番偉いのがですね、恐らく少将クラスか中将、中将じゃない恐らく少将クラスなんでしょうね。そういった偉いのが来て、択捉島はソビエト軍が占領しちゃった。だから、これからはソビエトの軍政をしきますっていうような挨拶をして、戒厳令なので外出は朝何時～何時までといったそういった細かい事まで言い始めたんですね。

その時のまず第一声は、我々がここを占領した。これからは国境線を引く。ただし、日本人の

住民の命とせめて財産は保証すると言ったんですね。日本の通訳さんなんですけど、本当にロシア語通訳ってというのはこんなに私は素晴らしいのかと思ったんです。背の低い、しかも大学からその戦地に引っ張られて来たような、非常に子供子供した小柄な人がですね、堂々と通訳したんですね。私びっくしたんですよ。「えー」って、「やっぱり勉強ってというのはこういうもんか」って思ったんですね。ただ通訳さんの顔じーと見ておりました。

顔は本当にインテリ風なんです。小柄だし、青白いし丸眼鏡をかけていて、いかにも気弱そうなんです。ところが、その通訳さんが堂々と通訳してるんです。もうびっくしたんですね。「はあー」と。同時通訳ってというのは、生まれて初めて側で見たもんですから、びっくりしてしまっ、て、「はあーいかに勉強って大切か」ってその時つくづく痛切に感じました。自分がいかに勉強しなかったかと、ていうことも合わせて後悔の面も起きたわけですが。

それで、その中でカトールイって言葉を非常に多く使うんですロシア人が。そのカトールイってというのは、我々戦争に負けたもんですからお前達は下等人間だと。下等人間ってというのは非常にそういう屈辱的な思いで、カトールイっていうのを聞きました。ところが、カトールイってというのは関係代名詞なんです、何々するところの何々、だからしょっちゅう中間の言葉でカトールイって出てるんです。これも後から、判ったわけですがそんなことでロシア語も初めて生まれて初めて聞いたということです。それで、それが2~30分で終わって解散になったんです。解散になってすぐ、15~20分ぐらいしたら、一斉に家宅搜索ですね。で、かれら3人1組になって、それで一軒一軒家宅搜索をするんですね。やっぱりこの時に、色々な問題が起きるって初めて判りましたですね。

それは、家の隅から隅まで見るわけですよ。もう本当に箆筒も開けて、箆筒の隅まで銃でほじくり返すんですね。一番は武器とかそういったものを隠していないか徹底的に調べるんですね。その時に、色々な問題がやっぱり起きてるんですね。例えば、腕時計なんていうのは、非常に彼らにとってステータスシンボルみたいなもんで、彼らなんか誰も持ってないんですよ、兵隊は。だからそれを非常に欲しが。だからそれを下さいと、くれと。日本人はよこせって例えば「ダァバイ」っていう。よこせっていうふうに聞こえる。それから、後から私も判ったんですが「売ってくれ」って「クピクピ」って言うんですね。その「クピクピ」っていうのも「ダァバイ」っていうのも「スコリカ」っていうのもやっぱり、負けた国民からみますと「何かよこせ」って言うような感じがしたんですね。ですから皆、時計を取られたとか、万年筆を取られたって。古い人はそういう思いでいると思います。

私は母と前もって打ち合わせて、恐らくこういうことになるだろう。だからその時は、箆筒は開けられても、何を持って行かれても、それは自分達の命が命の引き替えになるのであれば、もう喜んでそれを出そうということでしたので、別にそういうことされても、これは当たり前だと。負けた以上はやむを得ないだっ、て、そういった割り切った思いでおりましたけれども、そんなことでその年は過ぎました。

1946年のもう1月ぐらいになりましたら、民間人が入ってきたんですよ。民間人が入ってきて、それで日本人はいわゆる身分証明書、ロシア語の身分証明書を発行するということで身分証明書出ました。その時、おかしいと思ったんですね。本来であれば、ただ単に占領されたのであれば、軍隊はいつか出ていくわけですよ。だけど、民間人ってというのは入ってくるわけ無いんです。ところが、民間人が入ってきてしかも我々に身分証明書を出すと。その身分証明書も、実に立派なルーブル紙幣と同じ紙の質なんです。それであの当時は、ソ紙なんてもう本当に藁半紙みたいな紙が貴重だった。そんな時代なんですよ。それなのにこの立派なこの紙。しかも写真付きで。

16歳以上ですが、全部それに刻印してですね、それでそれを絶えず持ってなければいけない。それがなければですね、スパイ容疑によって連れて行かれると。それぐらい大事な、本当に命より大事な紙切れだったわけですが、そういったものを持たされた。

それで軍隊が、国境警備隊に変わったんですね。その国境警備隊っていうのが、これが今まで来た軍隊と違って独ソ戦線で戦ってきた連中なんで、年がちょっと上で体のどこかに弾の傷が必ずある。それで凄い軍隊だったんですね。それが、カルピンコっていう少佐が自分の家族も連れて来て、それからまた1年生活が始まったんですよ。それで、日本人の大きな家に間借り、間借りっていうのは1つ部屋を提供させて、それで生活していました。家ではお医者さん。軍人は軍医をですね1人、1人っていうか軍医を下宿させたわけですが、これとはまたいろんな私個人的には色々ありまして、色々の良い事ばかりなんですね。

そういうことで、彼らの家族が入って来た、民間人が入って来た。ロシア人は物が全くないですね。着る物は着たきり雀ですから、もちろん何もないんですよ。ところが、砂糖とかバターとかそういった物はちょこちょこでも配給になってるわけです。日本人は比較的こういう物を持っている。島辺りは全然空襲ありませんから。

ところが、彼らはそういった物より衣類が欲しい。だから、こういう小さなガラスコップに砂糖を持ってくるんですね。これと何か交換してくれて、ロシア語で言う。砂糖持ってきて、何がいの？って言うと、言葉もちろん通じませんから、そしたらこういうもんだと、ハンカチとかと身振り手振りでやって、物々交換が始まったんですね。

それで実際には今は変わらないと思いますが、1ルーブル4円だったんですよ。ところが、1ルーブル4円どころか1ルーブル1円。それから、1円も1ルーブル。1円は1円、そういう為替レートっていうのか、そういったものが暗黙のうちに何ていうんですか、交換レートになって、引き揚げて来るまでそういう計算しました。

非常に向こうの女性はですね、人懐っこいところがあります。戦勝風っていうのは吹かせないんですね。普通の対一の場合は、絶対戦勝風っていうのは吹かせない。自分達は勝った、お前達は負けたって言わないですね。それから暴力を振るいません。普通かなりの言い合いをして、日本語とロシア語で絶えず文句を言い合ってもですね、絶対彼らは人を殴ることはしません。こうやってもですね、やらないですね。そのへんは偉いと思いました。

そんなことで、今度は日本人の若い者が、若い者はっていうかその辺の男は全員16歳以上は全部働けと。働かない者は配給しない。まさにスターリン憲法働かざる者のは食うべからず。そういうことで、働かなくてもいいよって。ただし、食料は配給しないよと。そういうことですから、40、50歳の人でも例えば村長さんっていうのは一番最初に働かなければならない。我々の組織っていうのは、ソビエトのあれになりますから、日本の組織っていうのは、めちゃくちゃになって何も無いわけです。普通の労働者として働けということになって、しかし、海の仕事っていうのは非常にキツイです。ですから、40、50になったら海の仕事なんて出来ません。それで、止めてもいいんです。止めてもいいんですけども、食事の配給はしない。ですから、そうなる自然にやっぱり闇で売ったりっていうか、物々交換とかして生活してきた。そういうことなんですね。

男は全部、いわゆる冬は燃料用の薪切りとか、それから、4、5、6月ぐらいまでは、鱈釣りと言って、延縄で海に行って鱈を釣る。それから、7月、8月、9月、10月ぐらいまでは今度、サケマスを捕るわけですよ。それを全部若い者、私なんかも随分やらされましたけれども、そういう生活で2年間過ごしたんですね。

1947年の8月30日に、ちょうど私も沖に出てたんですが引き揚げ命令が出たよって陸から叫び

声が聞こえて、それで夢中になって漁場に帰って村へ帰って来たわけですが、その時はカルピンコっていう国境警備隊の前に1人ずつ呼ばれて、お前は行くことになった。残るなら残ってもいいよと。こんな国なんて残るものかってそんな思いで来たわけですが、それで8月30日にですね、これから36時間以内にお前の荷物を全部まとめて、それでトッカリモイっていう漁場があるわけですが、そのトッカリモイに集まれと。

そして、とにかく日本も空襲で大変だろうからって、こういうシャツやなんかを全部丸めてですね、出来るだけ小さくして圧縮してこんな大きな荷物を持ってですね、1人30キロまではいいということだったんですが、1人30キロなんて持てないですね。全部で、おばあさんが途中で亡くなってるんで、母親を入れて9人。3×9=27、270キロまでは持ってたんですよ。ところが、270キロってもの凄いんですよ。しかも、その荷物を担いで1キロ先の所に行かなきゃならない。途中は、崖の細い道なんですね。そこをくっついて何回も往復しなきゃいけない。そんなことで、やっとそのトッカリモイに集まった。そうしたら、いつ船が出るってということもないんです。これもやっぱりソビエト風、風なんですね。集まれ、何時何時行くぞって言うことは言わないんですよ。船が来るまで待ってろって。ですから、そのトッカリモイに行ってから3日も4日も待たされるんですよ。そして突然朝になって、これから何時になったら船に乗る。慌てて皆、船に自分の持ってきた荷物を入れて、出たわけです。これから曾木谷、曾木谷っていうのはやっぱり漁場なんですね。30キロ弱ぐらいの所の漁場。そこに集まれって言うんですよ。ですから、3隻の漁船いわゆる発動機船にですね皆便乗して、それで薬取のトッカリモイっていう所を出たんですね。

ちょうどその年っていうのは、もの凄くサケマスが豊漁で、それで村の人達の半数を第一次送還者として指定したわけですけども、残りの半数者は漁場で大変な思いしてるわけですよ。ですから、見送りになんてもちろん来れないし、彼らが何時ここを出るっていうのはよく判らないですから、村の人もトッカリモイにも来れないと。ですから、見送る人達っていうのは、ほとんどいなかったです。むしろ、兵隊、国境警備の兵隊が立ち会いか何かに出てる、そんな程度でした。

それでも、飼い犬がやっぱり来るわけですよ。主人が来るもんですから。それで、我々が船に乗って、3隻の船でですね、岸を離れました。10mぐらい岸を離れて行くと、それまで岸をグルグルしていた飼い犬が、そのうちの一头が海に飛び込んだんですね。そうしたら、残りの犬も全部海に飛び込んだ。それで、我々の船を追ってくるんですよ。もの凄い勢いで追ってくるんですね。すぐ側、下船まで来てですね、僕も連れて行ってって顔でですね、クンクンクン言いながら追ってくるんです。我々はもう来るなど、来るんじゃない、もう帰きなさいと皆大声で叫ぶんですね。来るな、帰きなさいとか。それでも、犬はクンクン付いてくる。船は沖、ちょっと岸から離れますと、スピードを上げます。そのオペレーターもですね、もうスピードを上げると、犬もそれなりに付いてくるんです。本当に必死になって連れて行ってくれって、もう目で訴えるんですね。もう皆もう、飼い犬でなくても、皆帰きなさい、帰きなさいって、もう帰れって大声になっていたんですね。それで、我々はもうとにかくここ自分の故郷を追われる、もう行かなきゃいけない。その悔しさとか、そういった無念の気持ちっていうのは皆抑えてるわけですよ。皆が帰きなさい帰きなさい、その言葉がですね、今まで堪えていたものが、いっぺんにわんって大きな泣き声になって、それで、トッカリモイって岩があるんですが、それにこだまするんですね、異様な雰囲気です。帰って参りました。

ですから、そういった思いで我々は島を追われて来たわけですよ。一旦、曾木谷っていう所に集

結して、また2～3日そこで留められてそれでソビエト貨物船に乗せられるわけですがそんな思いで来ました。

元島民も高齢化になり、我々が受けたそういった苦難、苦悩っていうか、そういったものを本当に伝える人っていうのは、あまりいなくなりましたね。ですから、これからはやっぱり後継者の人達にそれを伝えていってもらわないといけない。そういう思いであります。

そして樺太へ送られてくるわけですが、樺太でも本船から降ろされて収容所まで行く間はですね、真岡の町を真岡のメインストリートを我々はズルズルと引かれて行くわけですね。ソビエトの兵隊が何カ所かに連れてくるわけですよ。

そういう目に遭って、初めて国が敗れたと、国が負けたと、戦争に負けたっていうのはこんな恥をかかないといけないのかと。それで、私は本当に泣きながら、収容所まで約3キロぐらいを歩かされるわけですけども、そういう思いで来ました。戦争に負けるっていうのはこういうことかと。その当時はまだ若かったですから、非常に血気盛んなそんな思いもしたと思いますけれども、そういった思いがあってこの歳になるまで返還運動をしているわけですけども、年配者だとか或いは島の歴史っていうもの、歴史の重さっていうのものを知っている元島民とは段々少なくなってきました。

そういうことで、よく返還されるのは1島とか2島とかそんな話が単純に出てきますがそうじゃないんですね。やっぱり我々が帰りたいっていうのは、択捉島出身者は択捉島、国後出身者は国後と。それから色丹は色丹。歯舞群島であれば、多楽島とか、勇留島とか秋勇留島とか、水晶島とかあります。その出身者の人達が、本当に自分が生まれ育った島へ帰る。これが本当の返還なんです。そういうものを求めて、一生懸命やっております。ですから、この北方領土っていうのは私達島民の本当に故郷なんです。その故郷が遠くにあると、そういう思いを持っております。

ですから、政府も日本の威信にかけて領土返還っていうものを本当に真剣に進めて欲しいとそう願っております。皆様の返還運動の熱意に対しまして、私たちもこれから一生懸命に返還運動の先兵としての役割がありますから、それを肝に銘じて目的成就のために、一生懸命、また返還運動を続けていきたいと思っております。どうぞこれからもご支援の程よろしくお願ひしたいと思います。本当に今日はありがとうございました。

択捉島元島民 安田 愛子 さん

皆さん、こんにちは。ただ今、ご紹介を頂きました安田愛子と申します。どうぞよろしくお願い致します。

昨日、帯広市から参りました。金沢市は暖かいですね。北海道は、稚内や網走にもう雪が降りました。十勝もとても寒いです。陸別という所は、私が昨日来る時はマイナス3度ということでした。

皆さんは、北方領土がどの辺りにあるかご存じでしょうか。北方領土は根室の北東に位置しております。大きい島から言いますと、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島この4つの島が北方領土です。また、北方四島とも呼んでいます。

納沙布岬には返還要求シンボルマーク、島の架け橋というのが建っています。資料館も最近出来まして、元島民が引き揚げて来た時に持ってきた家財道具等が、色々と展示されております。

また、私の母が島から持ってきた、ミシンも展示されています。納沙布岬から3.7キロの所に貝殻島がすぐに見えます。また、野付半島から16キロの所に国後島があります。択捉島は長い島で、全長が214キロメートルあります。また、国後は122キロメートルあります。

これから当時の薬取村のこと、ソ連軍がいきなり入って来たこと、一緒に生活したこと、強制送還で樺太の真岡に連れて行かれたこと、真岡から北海道の函館港に帰ってきたこと、それが終わりましたら、引き揚げて来てから初めて、自分の村、薬取村を訪問した時のこととお話したいと思います。

では、当時の薬取村のことです。薬取村は漁業の村です。秋に秋味が捕れる頃になると、本州や北海道から沢山の人達が出稼ぎに村に入ります。村は普段、500名足らずの人口なんですが、その頃になると1,000名以上にも膨れ上がって、村は一気に活気づきます。川は、棒を立てても倒れないぐらい、川幅いっぱい真っ黒くなって鮭が遡上してきます。ある村では、その遡上してきた鮭の背中の上を、ネズミが走って渡っているのを見たと言う人もいます。そのぐらい鮭が沢山おります。鮭の漁が終わると、出稼ぎの人たちは、また元の自分のところに帰ります。村は元の静けさに戻ります。

子供の遊びといえば、男の子も女の子も、海や山や川で遊びます。私はよくカレイを捕ったことを思い出します。砂浜の浅瀬で遊んでると、カレイがずっと来て砂の中に隠れる。そうすると砂がポコッと上がります。カレイが隠れたということがすぐ判ります。それを足で踏んで捕ります。いくらでも捕れました。川には目で見えるほど魚がウヨウヨとしております。

大人の楽しみといえば、小学校の運動会や学芸会です。子供がいない家庭でも、村人全員が集まって運動会や学芸会を楽しみました。また、村祭りでは、素人歌舞伎などもして楽しみました。薬取村には、日本一の落差があるラッキベツの滝があります。直瀑でまっすぐに海に落ちている滝は141メートルあります。

明治の初め、蝦夷地を北海道と名付けた松浦武四郎という方をご存じですか。北海道と名付けて今年で150年になります。その武四郎日記にはラッキベツの滝是那智の滝よりも迫力があって美しいと書かれています。那智の滝は和歌山県にありますが、133メートルです。

また、択捉島は戦争に関わっている事があります。昭和16年12月8日真珠湾攻撃です。択捉島の単冠湾は、日本の連合軍隊が集結して停泊地としました。航空母艦が6隻、戦艦25隻、戦闘機

382機、日本の総力を挙げて海軍機動部隊が単冠湾に集結しました。11月26日の朝には一隻の戦艦もいなくなりました。近くに住んでいた村人の話では、湾一面が戦闘機で埋め尽くされて、夜になるとサーチライトが照らされて、まるで昼のようだったと言っていました。

もう一つ、歴史的に大事な事があります。1798年、寛政10年8月幕府は大規模な調査隊を村に派遣しました。近藤重蔵、最上徳内は択捉島に渡り、大日本恵登呂府と書いた標柱をカムイワッカに建てました。この島が、完全に日本の領土であるということを示しました。

薬取村は自然が豊かで平和な村でした。どの島も、どの村もそうでした。島を故郷に決めた人達は、明るい希望を持って生活をしておりました。ところがです。戦争が終わって、昭和20年の8月の末、ソ連の軍隊がいきなり島に上陸してきました。あちこちの村では、土足で家に軍隊が入り込んで、自分の欲しい物を持って行かれたり、強姦騒ぎがあったり、殺された人もおりました。兵隊に何か悪さをされるのではないかと、年頃の娘さんは頭を坊主にしたたり、顔に墨を塗ったり男の服を着たり、家の隠れ押し入れの中に隠れたり、天井裏に隠れたりもしていました。

私の村では、家の中に土足で上がって、色々な物を物色されて、持って行かれた家は沢山ありましたが、殺された人はおりませんでした。

また、根室に近い島民の中では、ソ連の厳しい監視の目をくぐって島を脱出した人が大勢おります。その船での脱出の時に、時化にあって船もろとも海に投げ出され、命を落とした人も沢山おります。

ソ連人とは2年間一緒に生活しました。ソ連人は空き家、旅館、官舎、それに空いている家、大きい家は2つに仕切って、片方が日本人、片方がソ連人というふうに住みました。

私の家にも、若い将校が1人寝泊まりしておりました。私の家族は7人家族です。一番上の姉がちょうど中学生だったので、北海道の網走の叔父の家に行き、そこから中学校に通っておりました。島には小学校しかありませんので、中学校に行きたい人は大体北海道に勉強します。

ソ連人が入って来てからの小学校は、普通の教室で学ぶのは日本。それから、体育館で学ぶのはソ連人の子供たちです。ソ連の校長先生が、自分達は後から来た者だから体育館でいいと言ったそうです。私はソ連の子供たち、一緒に遊んだと多分思うのですが、あまり記憶が残っていません。男の子はよく喧嘩をしたと言っていました。喧嘩の原因は何かと言いますと、物の貸し借りなんですね。

例えばスキーを貸してくれと言うので、日本人は優しいですからすぐ貸してあげますよね。そうすると、なかなか戻ってこないらしいのです。それでスキーを返してくれ、いや返さない、そう言って取っ組み合いの喧嘩をしたと言っていました。自分の物は自分の物、人の物も自分の物そういう傾向が多々あったようです。

私の母は、村で1人だけミシンを持っていました。先程お話しした資料館に展示してあるミシンです。そのミシンで、ソ連の将校の奥さん方のドレスを何枚も作ってあげていました。ソ連人が入って来てからは、通信線が全て切られてしまいました。また、船の航行が出来なくなりました。食料が不足しました。食料を得るために着物、時計、カメラ、万年筆などと交換しました。ソ連人がカメラや時計、万年筆、そういう物を持つということは、彼らにとっては、ステータスシンボルだったようです。

ソ連人の食べ物は、黒パンです。パンの厚さと大体同じくらいバターをすごく塗るんですね。その上に砂糖をかけて食べていました。パンの生地を捏ねる時、鍋とかボウルとかあんまり持ってきていません。それで、朝顔を洗う洗面器で顔を洗い終わった後、お昼頃になるとその洗面器でパンの生地を捏ねるんですね。そして夜になると、それが子供のおまるになるんです。ですか

ら、日本人とは全く考え方が違いますね。洗えばいいっていうそういう考え方ですね。兵舎ではパンを焼く釜がないと言って、火葬場のレンガを持ってきてパン釜を作ったり、また墓石を持ってきて家の土台にしていたと、私はずーっと後から聞きました。

私が2年生の時、昭和22年8月の末です。強制送還、引き揚げの命令が下されました。36時間以内にトッカリモイに集結せと言うんです。トッカリモイというのは、村からしばらく歩いたちょっと入り江になった所です。船着き場もあって、番屋もありました。父と母は、すぐさま写真や書類類を家の空き地に穴を掘って埋めました。引き揚げの検査の時に、その書類や写真を持って出るとスパイ行為と見なされたそうです。それで私の家には島の写真は1枚もありません。

引き揚げの時、村のみんなは着の身着のまま少しの荷物を持って、トッカリモイの船着き場まで歩きました。その番屋で数日泊まり、船が来るのを待ちました。船に乗ると決まった時、私の父だけが残るようにと命令されました。父の仕事は水産孵化場の技師でした。孵化技術をソ連の人達に教えるために残されたということです。

船が3艘ほど来ました。船に荷物を敷き詰めて、その上に人が乗ります。私達は島を離れる悔しさ、寂しさを背負って村を出たのです。

船は次の村、曾木谷という所まで行き、曾木谷に上がって倉庫に数日泊まって、引き揚げ船が来るのを待っていました。子供は早くから目が覚めて、倉庫の前で遊びます。私の旧姓は臼井っていうんです。大人の誰かが、大きな声で「臼井さんが来た」って言う声が聞こえました。私はびっくりして後ろを振り向くと、遠く朝靄の中に父が馬に乗って走ってくるのが見えました。番屋から沢山の人達が出て大騒ぎとなりました。

父の話ですと、私達が村を出る時ちょうど家で寝泊まりしていた将校がソ連に行っていていなかったんですが、その将校が帰ってきてみると家には父しかいない。いつもの家族がいない。どうしたと聞かれたそうです。父が訳を話すと、その将校は上層部に何とか掛け合ってくれて、父が帰ることを許されました。父はすぐさま真っ白い馬のシロにすぐさま乗って、夜も寝ずに真っ暗い道を走って走って、とうとう曾木谷まで来てソ連の引き揚げ船に間に合いました。

本来であれば、将校は敵国の人と言ってもいいですね。でも家族一緒に帰れるよう、取り計らってくれました。人として将校の気持ちを、今でも忘れることは出来ません。

曾木谷からソ連の貨物船に乗る時、大きなモッコ、皆さんモッコってご存じでしょうか。魚を揚げる大きな網です。それに荷物を敷いて、その上に人間が沢山乗ってウインチで上げられて、貨物船の船底に下ろされました。

そこに何百人もの人が、そこで寝泊まりをします。甲板に上がるには、貨物船ですから細い真っ直ぐな梯子を登らなければなりません。子供はトイレが間に合いませんので、大人が桶のようなものを沢山用意してくれました。その桶で子供は用を足します。そして、沢山になると大人がそれを持ってその細い梯子を登って、甲板に出て海に捨てます。大人も大変です。船にトイレが何個か作ってあるんですが大勢なので間に合いません。間に合わない人は、甲板のあちこちで用を足します。その臭いが凄いのですが、大波がくると汚物が飛び散ってくることもありました。

船が樺太の真岡に着きました。収容所は学校でした。なだらかな長い坂道を、随分長いこと歩いて収容所に着きました。またトイレの話になりますが、トイレは収容だから、ずいぶん離れた所に作ってありました。本当に深い深い大きな穴だけ。そして、板だけ渡したトイレが幾つも作ってありました。樺太の土は、ちょっと雨が降ると粘土のような土でツルツルと滑って、とても歩きにくいんですね。私はトイレに行く時には、いつも姉と一緒に歩いておりました。本当にトイレが、間に合わない人が次から次から1つのトイレにまたがって、男も女もなくそこで用を

足すんですね。本当に大変でした。その深い深いトイレに何人かの子供が落ちて亡くなりました。助ける術はありませんでした。

食事も粗末な物でした。栄養失調になった人、病気になった人、沢山おりましたが皆亡くなりました。

しばらくして、日本の大きな船が迎えに来ました。真岡から函館港に着きましたが、すぐには降りられませんでした。船の中で、感染症が流行ってまた別の船に移って、10日程そこで過ごしました。いよいよ下船するという時に、頭の上から体中消毒用のDDTをみんな真っ白になって振りかけられて、下船しました。

父の仕事の関係で、あちこち転勤して歩きました。小学校は4回変わりました。でも、どの学校でも今のようにいじめもなく、どの学校でもみんな優しくしてくれましたので楽しかった思い出ばかりです。

引き揚げが終わり、引き揚げてきた島民から四島返還の声が拡がる中、墓参やビザなし交流、自由訪問の事業が始まりました。今までに日本から、22,000人程の人が四島を訪問しております。また、四島からは9,460名程の人が日本を訪れ、交流を深めております。

私が引揚げてきてから、初めて自分の故郷薬取村を訪問した時のこととお話したいと思います。今は「えとぴりか」という北方四島交流専用船ができ、その船で四島を訪問します。私が十数年前に行った時はまだそういう船は出来ていなくて、北海道の実習船か民間からの借上船でした。確か「ロサ・ルゴサ」という船だったと思います。

朝9時に根室港を出港します。1時間10分程行った所が通過点です。北緯43度、東経145度の辺りです。そこでロシアの旗を掲げます。また2時間程経って国後島の古釜布沖に停泊します。そして、ここで入域手続きというものがあります。随分時間が経ってから、検査官が船に乗り込んで手続きをします。その時、国後からロシアのハンターが3人乗り込みます。択捉島は熊がいるので、ハンターがいなくて危ないんですね。入域手続きが終わり、船は国後水道という国後と択捉の間を通過して、次の朝薬取浜に停泊しました。

すぐ、目の前に薬取浜が見えても船は接岸できません。その船に伴走船という少し小さな船がついてくるので、本船から伴走船に乗ってさらにボートに10人程乗って、そして浜に揚がるんです。ちょっと波の荒い時は、本当に海水も入ってきて「ああ、もうここでお終いだ」ということがあります。それでもみんなは、何回も乗り変わって浜に揚がります。

いつも思い出していた、山や川は昔のままの姿で私達を迎えてくれました。私は、ボートから降りて砂浜に足を付いた時、何故か涙が止まりませんでした。村のみんなも感激ひとしおでした。どこかで「ただいま」という声が聞こえました。沢山あった家は何1つありません。ただ、草原と砂原になっておりました。家はみんな焼かれたり、壊されたり燃料として使われたと聞きました。また、日本の影を残さないためとも聞きました。

村の皆さんと墓地に向かう途中「ああ、この辺りに役場があった」「ああ、この辺りに井戸があった」「ああ、この辺りは誰々さんの家だったね」と昔を思い出しながら歩きました。

住んでいた頃は、墓は小学校のあった少しなだらかな丘をずーっと行った所にあったんですが、今は平らな所に移されています。墓に行く途中、足下にコンクリートのようなものを足に当たりました。それは何かと言いましたら、お墓の台座でした。丘から落とされた台座がまだそこに残っておりました。重くてきっと運べなかったんだと思います。背丈ほどの笹の中を掻き分けて、ようやく墓まで辿り着きました。墓は草の中に埋もれておりました。みんなで草取りをして、慰霊祭の祭壇を作って近くに咲いている花を沢山手向けしました。読経の中、長い間のご無沙汰をお詫

びして、一人一人お参りをしました。本当に長い数十年間、島を守って下さっているご先祖様。どんなにか私達が来るのを待ちわびていたことでしょう。

帰り、朽ち果てた今にも倒れそうな門が、ずーと遠くの草の中に見えました。門が学校があった所を教えてくださいました。また、数本の松の木が風雪に耐えて残っておりました。そこはお寺があった所を教えてくださいました。村には数人の衛兵とその家族が住んでおりました。現在は、環境保護地域となっていて、人は住んでおりません。私は何も開発されていないのに、なぜかほっとしました。私達が訪問するのを待っていたかのように、ロシア人が花咲ガニを沢山持って来てくれました。ロシア人の優しいおもてなしの心に感謝して、花咲ガニをご馳走になりました。とっても美味しかったです。薬取の味でした。

ソ連が北方領土を不法占拠してから73年が経ちました。今では多くの島民の方々が、お亡くなりになってしまいました。北方領土返還を夢見ていた人達です。どんなにか無念だったことかと思えます。

17,291名いた島民も今では6,041名程になってしまいました。平均年齢が83歳となりました。皆様を始め、多くの全国の皆さんが返還運動を続けております。国民一人一人の署名が国民の声として国を動かし、早期返還に繋がるだろうと思っております。

どうぞ皆さん、北方領土を忘れないで下さい。北方領土に関心を持って下さい。北方領土は島民の島だけではなくありません。美しい島、資源ある宝の島、北方領土は日本固有の領土です。そして、日本の財産です。一日も早く両国が平和条約を結び、北方領土が日本に返還され、安定した友好関係が持てるよう、願うばかりです。

最後になりました。北方領土、我が故郷は近くて遠い思い出の島。これで終わらせて頂きます。